

隻腕の提督が着任しました

F. ヴィンケル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如海より現れた正体不明の侵略者。

その侵略者に、人類は為す術もなく蹂躪された。

人類の叡智である、兵器の効果は微々たるもの。科学、非科学、ありとあらゆる手段を用いても、敵はそれをあざ笑うかの様に海を、土地を、人を喰らい尽くした。

さらに敵の本拠地は海。

海上、海中を移動できるには圧倒的有利であり、地上に生きる人には圧倒的に不利な戦場。

それでも人は立ち向かった。

どんなに強大な敵にも、どんな絶望的な状態でも、地べたを這い蹲り、泥水をすすり、血反吐を吐きながらも、人間は立ち向かった。

その時、奇跡が起こる。

研究に研究を重ね、諦めずに足掻いてきた人間達が、想いを、命を、魂を賭けて造ってきた兵器に自我が宿る。

自我を持った兵器達は、まさに科学と非科学の融合体。

彼等は反撃は、敵に届いた。

兵器達は人の想いを宿し、人々と共に戦う。

人類は歓喜した。ようやく、ようやく反撃の狼煙を上げれるのだ。

人類は、自分達が創り出した『彼等』と共に手を取り戦った。

しかし、それも長くは続かなかった。

最初は善戦するも、敵の圧倒的物量に、また徐々に徐々に敵に蹂

躪されて行く。

唯一の攻撃手段である兵器達も、破壊され、海の藻屑となつて行つた。

ついに物資も底をつき、全滅の悲劇が始まろうとした時、奇跡は再び起こつた。

それが最初に起きたのは、日本という小さな島国である。

巫女と呼ばれる娘達が、兵器の力を宿したのだ。

しかも彼女達は、自分達の力の使い方を知っていた。

彼女達は兵器として、人々と共に戦つた記憶を持っていたのだ。

人類に造られた兵器達は、兵器である自分達を、時には親の様に、時には友人の様に、かけがえのない大切な『人』の様に接してくれた人類を愛していた。

蹂躪された憎しみ、散つていった自分達の『仲間』や『親』の仇を取るために、愛した『人』の形を得た彼女達は再び戦場に舞い戻る。

対深海棲艦艦隊艦装保有者。

巫女達にしか使えない、当時の兵器達の艦装を振るい、愛する人々の未来の為に戦う娘達。

彼女達は親しみと愛情を持って、こう呼ばれた。

『艦娘』と。

目次

1章	1	はじまり	1
1章	2	舞鶴鎮守府奪還戦	10
1章	3	牢獄解放	18
1章	4	吹雪	27
1章	6	舞鶴鎮守府防衛戦	36
1章	7	終幕	44
2章	着任		52
2章	復讐者		61
2章	3	記憶持ち	71
2章	4	弱さ	80
2章	5	受け継ぐ思い 前編	90
2章	6	受け継ぐ思い 中編	102

1章――1 はじまり

私はなんだろう。

数え切れないほど問答しても答えは出ない。

私は誰なんだろう。

考える度に擦り切れる心。

私は何故生まれたのだろう。

心は腐り落ちていく。

私は死ぬべきなのだろう。

あの人が言うのだから、それは正しいのだろう。

その答えの場所を目指し、冷えきった心と身体を引き摺りながら前に進む。

声が…。

声が聞こえる。

たくさんの声が…。

私の処刑を望んでいる。

答えなきや…応えなきや…

私は彼等に応えるために…

――

「とんだ失態だ…」

横須賀海軍参謀本部。作戦会議室に大元帥の淡々とした口調からは考えられないほどの怒気が発せられる。

集められた幹部達は皆一様に口を閉ざしていた。

「貴様らは…いや、我らは一体何をやっていたのだ…!!」

大元帥は静かな口調とは裏腹に、握り込んだ拳で机を殴打する。

軍で使われるかなり丈夫な机なのだか、その机に軽く亀裂が入り、何人かの者は目を見開き、震え上がる。

それでも怒りは収まらないのか、歯を食いしばりながら周りを見渡す。

「何故…、何故…奴らの侵入を許した…人選は徹底していたはずだ…」

海軍の頭である大元帥の問いに、その場に居る幹部達は応えることが出来なかった。

大元帥も解っている。彼等は悪くは無い。

『敵』が自分達よりも一枚も二枚も上手であったのだ。

頭では解っていたが、その怒りを抑えることが出来ない。

それ程までに今回の事件は最悪のモノ。

一先ずは沈静化させたが、後は状況の収集に向かった『彼女』の報告を待つことしか出来なかった。

彼女からの報告次第、これからの対応を練るべく、会議室は静寂から喧騒に吞まれた。

――

時刻は遡る。

事の発端は先週行われた、全鎮守府から抜粋された艦娘達による総合火力演習。

毎年富士が見える沼津の港にある、海軍演習領域で実施されており、入場券は毎年完売という絶大な人気を誇っていた。

また、演習後のパレードにて艦娘達への触れ合いにより、国民達への艦娘への理解、もっては国の団結を強化するための大事な行事であった。

年に一度のお祭り。その様子はラジオやテレビを通して日本全土に配信され、老若男女問わず、皆が楽しみにしていた。

更に、半年前より建設された新しい鎮守府、舞鶴鎮守府の艦娘達のお披露目である。

国民達の期待は最高潮に達していた。

開会式が終わり、音楽隊の壮大な演奏と共に会場の全員一丸となって国歌斉唱を歌う。

大元帥の訓示を終えて、いざ大本命である各鎮守府の艦娘達による総合火力演習が始まろうとしていた。

それぞれ鎮守府毎に提督を筆頭として艦娘が入場し、その度に国民達から黄色い声援が起こる。

提督も艦娘達も各々、笑顔で手を振り観客達に返事を返していた。

「入場の最後を飾るのは新しく建設されました!!舞鶴鎮守府の艦娘達です!!皆様、盛大な拍手でお迎えください!!」

司会の紹介に会場の熱気が最高潮に達する。

舞鶴鎮守府はサプライズとして、参加する艦娘は他の鎮守府や国民には内緒にされていたので、誰も彼もが入場口に注目した。

入り口に人影が見え、観客達の歓声と万雷の拍手が鳴り響く。

しかし、そこで異変が起きた。

最初に現れたのは特型駆逐艦『吹雪』。

提督が先頭の決まりなはずなのに、何故か最初に出て来たのは吹雪であった。

正確に言えば、吹雪以外の姿が見えなかったのだ。

また、唯一入場した吹雪さえも異常であった。

その姿は幽鬼の様な顔立ちに、今にも倒れそうな、しかし確かな歩調。そして名を表したように透き通るような美しさの純白の着物を着ていた。

着物というよりも、それはどこから見ても死装束にしか見えない。

吹雪の姿を見た者達はみな不思議に思い首を傾げ、また不吉な姿に言葉を失っていた。

それもそうであろう。

吹雪のその異様な姿は、遠目から見たらその姿は、深海棲艦にしか見えないのだ。

かろうじて、『吹雪だ』と認識できるぐらいだ。そのぐらい吹雪の雰囲気であった。

動揺を隠せない人々が変わって、吹雪の近くにいた他の鎮守府の艦娘が声をかけようと近づいた時に、悲劇は起きた。

「私達は…人ですっ!!」

そう叫ぶと、吹雪は艦装を展開し、砲身を自身の頭部に向け発砲。自決をしたのだ。

至近距離の発砲に大きく頭部を仰け反り、小さな身体は吹き飛んで、派手に地面にぶつかる。

静寂の中に気持ちの悪い重々しい音が鳴り響く。

いきなりの出来事に誰も彼もが理解が追いつかず、呆然とする。

「呆けてる場合かッ!!支給衛生兵を呼べ!!急げ!!」

いち早く正気に戻った大元帥の怒号に、止まっていた時が動き出した。

まず最初に動き出したのは現場近くにいた他の鎮守府の艦娘達であつた。

凶行をした吹雪に走り寄り、安否を確認し何人かは衛生兵を呼びに走る。

「一般人の方々は慌てずに避難をお願いします!!近場の警備員は一般人の方々の誘導を!!」

艦娘達は艀装を展開して上空及び海域の警戒を!!

他の隊員は2人1組で速やかに警戒警備に当たってください!!

怪しい人物を発見したら速やかに捕縛を!!誰何の必要はありません!!」

先程叫んだ艦娘の横にいた別の艦娘が、大声で的確に指示を出す。それを聞いた艦娘や隊員達は、困惑した様子から一変して速やかに行動に移る。

流星は軍隊という事だろうか、急遽の出来事にも即時に対応していた。

また、命令を出した艦娘のおかげでもあるだろう。

命令を出したのは、大元帥の護衛に当たっていた2人の艦娘。

最初に叫んだのは大和型戦艦の2番艦『武蔵』。

次に指示を出したのは、大和型戦艦の1番艦である『大和』であつた。

彼女達は艦娘の中でもかなりの古参である。

民間人がまだ状況把握できず、騒動が起こる前に団員達は的確に避難誘導を始める。

「閣下、ここは私達に任せ、事後処理の準備を。恐らく彼女は生きています」

「な、何だ?!?模擬弾とは言え、至近距離で12.7の威力があるんだぞ…いや、さて」

大元帥は担架で運ばれている自決を：いや、自決未遂を行った艦娘を見た。

冷静さを取り戻した今なら解るが、確かに。

いくら艦娘でも、至近距離で発砲したならば顔から上は木っ端微塵になっっているはずだ。

しかし、ひどい損傷は見受けられるが、彼女の頭部は確かにある。ならば、あの爆風は何だだったのだ。空砲だったかのか。いや、しかし艦装は爆発していた。

そこで大元帥ははっと顔を上げる。

『艦装が爆発した』：…だと？

「彼女が発砲する直前、12.7にナイフが刺さるのが見えました。火薬が入ってる場所に当たっていたので、それで爆発したと思われま

す」
大和が何でも無いように報告するが、周りの幹部達は驚愕に顔を歪める。

恐らくは、この会場でその瞬間を目視出来たのはこの2人だけであろう。

更にその様な化け物の様な事を仕出かしたのは、大元帥が知る限り1人しかない。

「ま、まさか：生きているのか：アイツが」

「はい。私達もお会いするのはお久しぶりですが」

「殺そうとしても死ぬ玉ではないですよ。私の相棒は」

2人の艦娘はある人物を思い出してくすりと笑った。

そんな2人を見て大元帥は、人々が忘れたことの無い1人の人間を思い浮かべる。

それは、彼等の元司令官。

10年前の大規模侵略防衛戦の大英雄。

人類の守護神と言われた人間であった。

――

誰もいない通路を、2人の兵士が歩いていた。

精悍な顔立ちに、制服の上からもわかるよく鍛えられた体つき。

先ほどの大和の命令を受けて、通路を巡回していた。

「チャーリー、エコー。チャーリー、エコー。こちらチャーリー聞こえるか」

《チャーリー、チャーリー。こちらエコー。送れ》

「こちらチャーリー、こちらチャーリー。4 B 通路異常なし。引き続き警戒当たる」

《了解。引き続き警戒怠るな。通信終わり》

通信を終えると同時に、彼等は背後に気配を感じ、即座に銃を構えながら後ろを向く。

「誰だッ!」

銃口を向けた其処には、同じ白の軍服を身にまとった軍人であった。

更に見知った顔だったので、彼等は安心して一息つきつつ銃口を外し、笑顔を作り敬礼をする。

「お疲れ様です。申し訳ありません、気づきませんでした。提督殿」

「お疲れ様です。この辺は異常なしですか?」

「はい。今のところは異常等はありません」

提督が笑顔で返礼したところで、彼等はふと違和感を抱いた。

目の前の提督は自分達も知ってるかなり優秀な提督だ。おおらかな性格だが、任務には忠実で、かなり真面目な部類に入る。軍での信頼もかなりのものだ。

そんな提督が、1人でいるのだ。

ちらりと提督の肩に下がっている無線に目をやる。先程の大和の命令は無線を使い全ての隊員に行き渡っているはずだ。

「提督…お一人で?」

「ん? ああ、そうだよ」

「…先程の発令は聞こえてましたか?」

「先程の…ああ、大和のかな?」

嫌な汗を流しながら、提督から見えないように後ろの相方に左手で合図をしながら、自分も小銃の引金に指をかける。

「はい」

「ははっ、聴こえてたとも。どうしてだい？」

「発令では2人1組でしろと命でした」

慎重に話しながら、こちらに笑顔を向けている提督に警戒度を高める。

「舞鶴鎮守提督は何故お一人で？」

今ならわかる。この人の良い笑顔に隠された薄気味悪さ。2人は軽く寒気すら感じていた。

「決まっているだろう？」

悪魔のような笑顔を浮かべる。

2人はその表情を見た瞬間、小銃の安全装置を解除して、提督に標準を合わせる。

「道具の言うことなど聞けるか」

「ガッ!」

言うと同時に提督は抜刀し正面の隊員の首を跳ねる。余りの速さに、後ろの隊員が一瞬動揺してしまう。

「遅いね？」

「キサッ」

言い終わる前に返す刀で首を切り落とされる。

切り落とされた首は2つ同時にどさりと廊下に落下した。

「まったく、嘆かわしいですね。物の言う事なぞ聞くからだ」

舞鶴鎮守府提督はそう吐き捨てる、人の居なくなった廊下を進んでいった。

――

『人類至上主義』

名前の通り、人類こそが至高とするテロリスト組織である。

彼等は絶対的な差別者であり、人間の様な艦娘の存在を認めることができなかった。

『兵器は人に使われる道具だ。兵器に自我がいるものか。奴らはいずれ、侵略者同様に我等を侵略するであろう。その前に奴ら共々に消し去る必要がある』

彼等はその発表とともに、15年前に動き出す。

その勢力は未知数であり、艦娘に被害を与えるとということ以外に統一性は無く、様々な場所で暴動を起こし混乱を招いていたが、雲隠れが早く、ようやくの思いで捕縛しても即自害。

トカゲの尻尾切り状態で、組織の全貌が全く見えてこなかった。

そこからは、まさに忍びの『草』の様に命令があるまで、何年もの間周りの信頼を得ながら潜伏し、突如行動を起こすため発見がかなり難しいかった。

それは、友人だったり、愛する者だったり、自分の家族や上司だったりと様々であった。

彼らは、世間では『白』と隠語で呼ばれていた。

今回の舞鶴の提督も恐らくそうであろう。

彼は普通の家庭の出身で自衛隊学校に入隊。

勤勉で人間関係も良好。

学科実技共に優秀で今年より提督任務に就き、半年前に訓練実習を終了し、新しく建設中の舞鶴鎮守府に着任した。

最初の2ヶ月ほどは初めての着任との事もあり、数人ほど視察官や他の提督が通っていたが、艦娘との関係も良好であり、問題なしとの事でその後は彼に一任していた。

それから、定時連絡はあるものも、鎮守府の現状がどうなっているかは不明であった。

恐らく定期連絡も虚構であり、舞鶴鎮守にまだ『白』が隠れている可能性がある。

彼らの軍への侵入は長年の行動の中初である。

嚴重な軍の管理のなか、二度の機会は無い。

恐らく今回が奴らにして最大で最期の行動であるだろう。

それ故に舞鶴鎮守府の現状がかなり深刻だと予測される。

「閣下、進言をよろしいですか」

「む、聞こうか」

大和の言葉に、大元帥は思考の中から意識を浮上させる。

「閣下は現状の火消しのみ考えて頂いて大丈夫です。舞鶴はあの方にお任せを」

「…そうだな。現状を打破できるのは奴だけだろう。とりあえずはこの場だ。中将!!」

「はっ!!」

「先程の件は、擬装した深海棲艦の自爆による攪乱作戦と言うことにしろ。また、見つからないと思うが舞鶴鎮守府提督を探し出せ。生死は問わん」

「舞鶴鎮守府への増援は？」

「周辺警備のみで大丈夫だ。あまり近づき過ぎるな。」

「警備、のみですか？」

中将が疑問に返すのも当然だ。『白』が何人潜伏しているかは不明。さらに舞鶴鎮守府の艦娘たちもどの様な状態か不明なのだ。

先程の吹雪の行動を見ると、本当になにが起こるかはわからない。「ああ、警備だけで大丈夫だ。奴のことだからそれも無用かもしれないがな。恐らくヤツが動いた時点でこの件はもう解決している。」

しかし、今後の事を考えると軍を向かわせた方が事後処理に動きやすいくからな」

「成る程、了解しました」

しかし、この歴代最高の元帥と言われる方からの信頼に、中将はそれ以上の疑問を抱く事をやめて行動に移る。

「さて、大和、武蔵。君たちはどうするのだ？」

「私たちの今の役目は閣下の護衛です」

「先程閣下が仰った通りだ。私たちがいなくとも大丈夫ですよ」

中将の質問に対して歴戦の艦娘2人は笑顔で即答した。

その信頼に、大元帥も少し頬を綻ばしたが、直ぐに表情を引き締めると、観覧室を後にした。

1章―2 舞鶴鎮守府奪還戦

私は笑ってなければならぬ。

私が笑顔でないと、皆んなが壊れてしまうから。

私は笑ってなければならぬ。

私自身も壊れないために。

私は笑っていなければならぬ。

2人の想いをこの胸に……

――

舞鶴鎮守府。

建設されて間もない真新しい鎮守府だが、その建物は異様な空気に包まれていた。

この鎮守府は北とか西の門が2つあり、各門は固く封鎖されていた。

門の近くには殺された警衛兵の死体が転がっており、殺した警衛から奪ったであろう小銃を持ったテロリスト達が警備に当たっていた。

大元帥の読み通り、施設は武装した『白』の軍団に占拠されていたのだ。

ふと、北門警衛所の上から周りを警戒していた1人のテロリストが、双眼鏡越しに鎮守府に近づく1人の人間を発見した。

白い軍服に制帽。格好から察するに何処かの提督だろうか。

しかし綺麗に着込んだ制服の左袖側はなぜか棚引いており、腰には左右2本ずつ、計4本の軍刀を差していた。

警備の男は無線機のスイッチを入れ、鎮守府内にいる本隊に連絡を入れる。

「こちら北門、中央、聞こえるか」

『こちら中央。北門どうした?』

「提督の様な人物が1人、こちらに向かってる。周囲に他に人影は見受けられない」

『1人だと?交渉か?構うな、撃ち殺せ。見せしめにしろ』
「了解した」

男は通信を切ると、一緒に警備に当たっている下で門を守っている他の2名に合図を出す。

見張りの男からの合図に2人は銃を構えて、男が示した方へと銃線を向ける。

それを確認すると、再び監視の男は双眼鏡に目を当てて、再び同じ場所を見た。

しかし、其処には先程の人影が無くなっていた。

「なっ!?!」

男は慌ててて周りを見渡す。目を離したのはほんの1、2秒程度。しかし、姿形すら見当たらない。

監視の男は仲間に異常事態を伝えようと、叫ぼうとした瞬間――

「遅い」

男の命はその言葉を耳にすると共に事切れた。

上空から降りてきた提督の手によって。

正確には400m先からの距離をここまでジャンプして、監視の男を唐竹割りにしたのだ。

「さて、後は頼むぞ」

「御意に」

血糊すらついてない軍刀を器用に右手のみで納刀しながら呟くと、提督の側にはいつのまにか忍者風の少女が2人立っており、頷くや否や影の様に消えていった。

「始めるか」

今だにこちらに気づいてない下の2人に向かって跳躍すると、2人のちょうど間あたりに着地する。

前方を警戒していた2人は、突如現れた謎の人影に驚愕して銃を向けるも、弾が出ない。

「は?」

2人揃って自分の腕を見ると、其処には肘から下が何もなかった。理解が追いつかずに2人は謎の人物を見ると、既にこちら背を向けて歩いていた。

「開戦の合図だ。派手に喚いて逝け」

その眩きと共に2人は両腕を切り落とされた激痛に、獣のような悲鳴を上げながらのたうち回った。

鎮守府全域に響き渡る様な絶叫に、閉ざされた鎮守府のドアからは、武装したテロリスト達が、飛び出してきた。

――

提督と別れた後、川内と神通は提督の開始の合図と共に舞鶴鎮守府の中に侵入していた。

彼女達の使命は2つ。

1つは鎮守府内の脱出用隠し通路の破壊。

もう1つは監禁されているであろう、艦娘達の救助である。

「姉さん」

「ああ、いるね」

皆まで言わずとも川内は感じ取っていた。

ここで監禁されているであろう、那珂の気配を。

川内と神通、那珂はもともと同じ部隊であった。

しかし、2年前の海域奪還作戦の戦闘時に、那珂を守るために川内と神通は特攻を仕掛けて轟沈寸前まで戦い続け、奇跡的に生き延びたが、航海不能でただ死を待つだけで彷徨つてるところ、今の提督に発見され救助してもらい、1年間地獄の様なりハビリを行って動けるようになり、そのまま一緒に行動をしていた。

その間、長期発見できない事で、発見できなかった2人が轟沈寸前だったのもあり、軍では轟沈扱いになっていた。

那珂が塞ぎ込んでないかと事を心配していたが、提督が配慮して情報を流してくれた情報によると、那珂はまだ2人が生きていると信じており、自分を逃がしてくれた川内達意思を次いで元気に奮闘していると聞いて、号泣して喜んでいた。

提督は、直ぐにでも現場に復帰することが出来ると提案をしてくれて、川内は那珂を安心させたく早々に復帰をと考えていたが、特に神通が「何か恩返ししない事には」と一点張りで、今回の作戦に参加させてもらったのだ。

何よりもこの鎮守府に那珂が所属していると聞いたのも大きい。

正直、作戦概要を聞いた時には怒髪天を衝いた。

恩返しと言うよりも、また借りを作ってしまう形になったが。

慌ただしく『白』の組員達が動き回ってる中、2人は巧みに死角に潜り、見つからない様に奥に進んでいく。

やがて、提督室であろう、赤の大きな扉が見えてきた。

扉の前には武装した警備が2人。

直ぐに動いたのは川内。自分達と反対側の通路の曲がり角に向かい、警備の頭の上を通る様に苦無を投入し窓ガラスを破壊する。

「っ!?」

警備が驚いてそちらを向いた瞬間、神通が目にも留まらぬ速さで接近し、言葉を発する前に強烈な当身で失神させた。

「し、死んでない?」

「殺したい所ですが、大丈夫です」

川内も同じ気持ちだが、空間を歪めそうな怒気を目の当たりにして、逆に落ち着いていた。

気絶して倒れる前に支えていた警備を、音を立てない様にそつと地面に下ろす。

2人の親指を後ろで縛り付け、両足を縛り、口を布で塞ぐと、川内は扉に向かって耳を当てる。

「妙だ。人の気配がしない。」

しかし、那珂がいる様な気がする。

川内は神通を見るが、神通も同じ感覚の様だ。

トラップの可能性も考慮して、慎重に扉を少しだけ開けるも、何もなく扉は開いた。

先に川内が安全化の為に中に踏み込む。

しかし、そこは何処にでもあるような変哲のない提督室であった。

「神通、壁を確認して。私は床を」

「わかったわ。姉さん」

事前に確認した舞鶴鎮守府の地図と、ここに来るまでに確認した実際の空間、部屋や面積には違いは無かった。

隠し部屋があるならば、最後に確認したここであろうと踏んでいた

が、ここも問題はなかったのだ。

「駄目、姉さん。壁もクローゼットの中も異常ないわ」

「こつちも。隠し通路があるとしたら、天井かと思っただけ…何もなかった」

「凶面と確認しても間違いのない作り…しかし、姉さんも感じてるとは思うけど、那珂ちゃんの気配はこの鎮守府に内に…」

神通の言葉に再びフロアを見渡す川内。

確かに、なんの違和感もない。提督の机と秘書官の机があり、本棚、クローゼット。

「そこまで何も…何も？」

あまりにも殺風景すぎて逆に違和感を感じる。

「…神通。ちよつといい？」

「この部屋は…本当に使われていたのかしら？」

「え？」

そう、あまりにも綺麗すぎるのだ。まるで未使用の様に。

そして、恐らく本当にここには何もなく、外の警備もダメー。

「そこまでして敵が求めているものは。」

「…時間稼ぎ」

「姉さん、囚われた艦娘達が危ないのでは…!？」

落ち着け。考えろ。

良く考えろ。居なくなった艦娘のリストを思い出す。

居なくなった艦娘達の艦種は多々あった。それこそ駆逐から戦艦まで。

駆逐艦はともかくとして、戦艦クラスの捕縛は容易ではないはずだ。

「1番艦娘達が無防備になり、尚且つ気を抜いてしまう場所。」

「そんなもの1つしかない。」

「入渠場所が入り口か。しかし那珂の気配は鎮守府からする…という事は」

地下室か。

考えに至るや否や、神通は二階から飛び降りていた。

恐らく地下室にタイマー式の爆弾かトラップが仕掛けられているのだろう。

あとどれくらいで起動するかわからない。しかし、これだけは分かる。

恐らくは捨て身。『白』の集団はここで艦娘もろとも死ぬつもりだ。そこまでの考えに至り、神通の後ろを追う川内は寒気を覚えた。

何故、彼らはそこまで狂信的になれるのか。

何故、艦娘をそこまでして艦娘を恨めるのか。

時間にして、2分もかからずに入渠場に到着するが、神通が急停止した為に、川内も慌てて止まる。

「ちよっ、いきなり危ないでしょ!？」

文句を言いつつ前を見ると、川内も驚きに目を開く。

其処には既に一緒に来た提督が居たのだ。

――

「来たか」

提督の言葉に、2人は我に帰る。

「て、提督!どうしてここに!？」

いいながら、川内は気がついた。

先程まで感じていた殺伐とした空気が無くなっている。

「…もう、片付いたのですか」

「ああ」

神通の震えながらの質問に、何事もない様に頷く。

川内も先程とは違う冷や汗をかいた。

テロリスト集団約50名を、ほぼ一人で殲滅したというのか。10分足らずで…!!

提督の実力はかなりの物だとはわかってはいたが、それは間違えだと認識せざるおえなかった。

むしろ、本当に自分達は要らなかったのだろう。

神通は、恐ろしく無力であった自分に対して、羞恥と悔しきで震えていた。

「お前達が入り込んでから、合図がなかったもので、そっちの建物内には通

路がないと判断した。無駄足をさせてすまない」

「い、いえ!?そんな事はっ!!」

「お前達がこつちに来たと言うことは恐らく私と一緒に考えだと思いが違うか?」

「ま、間違いないかとっ!!」

ブンブンと手を振ったり、頭を縦に振ったりと忙しい神通に川内は少し和む。

「そうか。こちらからは何も言っていないのに流石の判断力だ。助かる」

「そ、そんな!!あ、ありがとうございます!!」

顔を真っ赤にして深々とお辞儀する神通に苦笑いしながら、川内は先を促す。

「という事はやはり、時限式のトラップがあるって事ですね。急ぎましょう」

『そいつは大丈夫やで』

唐突の声に、川内と神通は驚き構える。

そこには飛行機の形をした紙型の『式』が浮いていた。

『おっと、警戒せんでな。驚かしてしもうたか。ウチはその提督の昔馴染みやねん。式越しにすまん。初めまして、龍驤や。よろしゅうな』

「川内型の1番艦、川内だよ。よろしく」

「川内型2番艦、神通です。よろしくお願い申し上げます」

「それで、大丈夫というのは?」

川内の質問に対して、『式』が空中でぴよんぴよん動きながら説明する。

『言葉の通りやで。あんさんらが察しの通り、中には時限式の爆発式が設置されとったわ』

『『式型』ですか?』

『せやな。今時古臭いが『陰陽型の式』は発見されづらいからなあ。時間稼ぎにはもってこいやねん。今ウチが使ってる陰陽式の艦載機もめつきり減つてもうからなあ。自分らも初めて見るんちゃう?』

「た、確かに初めて見るわね。なんか普通の艦載機より使えそうな…」
『せやなあ。隠密やらこう言った行動にはすごく使えるんやけど、火力や射程範囲はめっぼう弱くてなあ…』

「な、なるほど…」

龍驤のため息に、神通は戸惑いながらも相槌を打つ。

川内は興味深そうに「ふむふむ」と頷いていた。

『さて、講習はまた会うた時にして、お互い急ぎの仕事があるから行こうかね。ほんなら、またな、お二人さん。提督もまた後ほど』

「ああ」

提督が短く呟くと入渠場の入り口に入っていく、龍驤の艦載機は空高く飛んで行った。

川内と神通もその後が続く。

入渠場に入ると、神通と川内は即座に中を探索。すると、ロッカーの1つの底に地下へと続くであろう嚴重な扉が見つかった。

下の状況がわからないので、砲撃するわけにもいかず、どうするかと2人が提督を見ると、何も言わずに軍刀を抜き、一閃の元に斬り開いた。

「私が先に行く。神通はここで警戒。川内は付いて来い」

「了解しました」

敬礼すると、神通は武装を展開。川内は脚に付けた苦無を抜くと、提督の後ろに続く。

「…那珂ちゃんを頼みます」

神通の呟きに、川内は振り向く事なく片手を上げて答え、地獄へと歩を進めた。

1章―3 牢獄解放

殺してやる

殺してやる

殺してやる

コロシテヤル

――

腐臭と悪臭が漂う地下通路に連れ、川内の心はどんどん暗くなつていった。

通路は少しずつ広くなり、今は最初の四倍ほどの広さだ。

(なんつて広さなの…)

あまりにも嫌な予感がする。今日の前にあるのは、恐らく最期の扉であろう。

ここまで階段を降りてすぐと、広さがある変わるあたり、南京錠付きの分厚い扉があったが、全て提督が破壊して進んだ。

トラップの類は、龍驤により解除されていたのだろうか、全く無かった。

というか、陰陽型は壁抜けが出来るのかと思つたが、提督に質問したところ、違つたようだ。彼女が特別らしい。

なんでも少しでも隙間があれば侵入出来るそうだ。

心底味方で良かったと、川内は心の中で溜息を吐いた。

「川内」

「はい」

「此処からは、恐らく本当の地獄だ。気をしっかり持て」

「…はい」

提督の言葉に、川内は身を奮わせる。

そうだ。此処に監禁された艦娘達がどんな状態からわからない。

「何があつても自分の身を優先しろ。同じ艦娘であるお前は恐らく危険性は少ないと思うが、鎖を外す時は気をつける。場合によっては襲われかねん」

「…了解です」

「しかし」

「…しかし？」

川内の疑問に、提督はたつぷり一息置いて付け加えた。

「お前を頼りにしている。頼んだぞ」

「ツ…はい!!」

提督の激励に、川内は声を押し殺しながらも、気合いの入った敬礼を返す。

提督は腰の軍刀に手をかけると、目に見えぬ速さで扉を斬り伏せる。

地獄の扉が開くと共に、魍魎のような呻き声と悪臭が中から解き放たれた。

「……」

「ぐめ…きゃ…ぐ」

「いたい…いたい…」

「……………」

「あ…あ…あ…あ…あ…あ…アアアアアアア!!」

「やだやだやだやだやだやだやだやだやだ」

扉が開くと同時に無数の声が聞こえてくる。

川内は周りを見渡して檻に繋がれた艦娘を確認する。

どの艦も大破状態。手首と足首と首を鎖に繋がれており、破れた制服から覗く肌は青痣になっていた。

この状態でかなりの間幽閉されていたのだろう。

身体は汚物まみれになっていた。

見える範囲で顔は痣だらけ。既に焦点が合ってなく、虚空を見つめている艦娘や頭を抱えて蹲り、ガタガタ震えている艦娘もいる。

それぞれの艦娘の目の前には、わざわざペット用の食事皿に『道具用』と書かれている。

(…なんなんだ…なんなんだなんなんだこれはツ!!)

川内は目眩と吐き気を抑えながらも、何とか脚とお腹に力を入れて踏ん張る。

この状況でこの子達は、何ヶ月この地獄を味わったのだ。

轟沈しかけて、死にかけてたかだか一週間漂流した自分達なんぞ足下にも及ばない。

川内が唇を噛み締めて、涙をこらえていると、その呻き声の中に聴きたくて聞きたくて仕方なかった声を拾った。

「みん…な……が……ばれ……ゴホッ……えが……ゴホッゴホッ」

川内はぼつと顔を上げて、もう一度周りを見渡す。

薄暗い、奥の方に。見慣れたシルエツトが見える。

「ゴホッゴホッ…わた…があ…まも…る…ゴホッ……」

「ッ!？」

叫びしそうになった所を、提督に口を塞がれる。

ほとんど八つ当たり提督を睨め付けるが、その冷めた、いや怒りを抑えながらも静かに自分を見つめる提督を見て、川内は気持ちを持ち直す。

「いま大声を上げれば、他の艦娘が怯える。堪えろ。それに見た限り那珂が1番の重傷だ。上に恐らく衛生兵と救護隊が来ているはずだ。一度那珂を連れて上に上げれ」

口を抑えたまま、耳元で一気に捲し立てる提督に、川内は頷いて答える。

提督は川内の頭を軽く撫でながら続けた。

「お前はお姉ちゃんだ。恐らく今の那珂の状態を見たら神通が止まらない。しっかり止めてやってくれ。それと、救護班を連れて他の艦娘も頼む」

「りよ…了解しました。提督はあの奥に？」

さらにあるもう1つ奥の部屋。冷静になった今だから分かるが、怒り、苦しみ、殺意の入り混じったもの凄い負の感情が流れてきていた。

「ああ。それが私の仕事だ。私が出てくるまで入ってくるな」

「了解です」

「頼んだぞ」

そう言うと、提督は川内の頭から手を離し、扉に向かって行った。

川内はそれを見届けると、中の方に静かに歩いて行った。

那珂が痛がってないのでホッとすると、更に脚の杭も抜く。

「直ぐに迎えにくるよ。みんな、申し訳ないけど…少し待ってて…」

聞こえてるかどうかわからないが、川内は那珂を抱えると、急いで出口に向かった。

那珂は持ち上げた時点で、安心したのか、眠るように意識を失っていた。

腕に抱いた妹に気を使いながら、元来た道を最速で戻ると、隠し通路の入り口にいる神通と目が合う。

「姉さん!!それに…な、那珂ちゃん?」

「神通、直ぐに何かかけるものを持ってきて」

「ね、姉さん…?な、那珂ちゃんのその姿は…?な、何を!?あいづツ!!?」

神通が叫び出す前に、川内は神通の顔面に渾身の平手打ちを入れた。

神通は壁に激突して、混乱した顔を川内に向ける。

「落ち着いた?それなら早くかけるものを持ってきて。その後、門の前に来てるであろう救護班と衛生兵を」

「…了解しました」

神通は川内の血の流れる手を見て、直ぐに落ち着きを取り戻した。

「姉さん…ありがとう」

神通はそう言うのと直ぐに行動に移る。

立ち去る瞬間、神通の唇からは赤い血が滴っていた。

そんな神通を見て、川内は寝息をたてる那珂を抱く手に力を入れたのだった。

もう、離すまいと。

――

重いドアが閉まる音が深淵と化した部屋に響き渡ると、微かに鎖が擦れる音が聞こえた。

提督は入り口直ぐ横にあったランタンを付ける。

其処は、先程の場所よりも更に地獄とかしていた。

鎖の付け位置は変わらないが、ほとんどの艦娘は杭で固定されていた。

それでも、衰えぬ殺気の渦。

「……助け……か？」

微かな眩きを聞き取り、そちらに顔を向けると、其処にいたのは戦艦長門。

かなりひどい状態だが、長門はしっかりと意識をもっていた。

「そうだ。遅くなつてすまない」

「……いや、ありがたい。貴君に礼を……っ」

其処まで言うと、長門は言葉を詰まらせる。

どうしたのかと視線の先を追うと、提督の左腕に視線が注がれていた。

「貴君……隻腕か……」

「ああ、前の大戦でな。抜くぞ」

「ああ、頼む……ぐっ!!」

長門が倒れそうになるのを右手で支えるが、長門はふらふらとどうにか一人で立ち上がる。

「私は……大丈夫だ。他のものに手を……貸してやってくれ」

「流石はビッグセブんだ」

提督の言葉に、壁に寄りかかった長門は目を見開くと、ふわりと笑って返した。

「手厳しい提督のようだ」

「すまないな」

「いや、久々に心地良いな。すまないが……他の者も鎖と杭を外してやってくれないか」

「当たり前だ。お前の鎖も直ぐに外す」

言うや否や、カチンと空間に音が響く。

それと同時に、全ての鎖が切断された。

長門は驚きに目を見開くが、何か納得したのか、提督に警告する。「貴女なら……大丈夫だと思うが……杭を抜くときは気をつけてくれ。何人かは修羅と化している。私の声も聞こえない」

困ったように笑う長門に、提督は落ちてるパイプを拾い上げて長門に渡した。

「心得た。そんな状態ですまないが、隣の部屋の艦娘を頼む。時期に救助が来る」

「了解だ。すまな…いや、ありがとう。後は頼む」

「ああ、頼まれた」

扉が閉まる音を背に、隻腕の提督は艦娘達の解放に向かった。

————

かなりの怒気を感じ取っていたが、どの艦娘も動けるほどの体力は無いようで、特に問題なく一通りの艦娘から杭を抜き終わる。

しかし、それは最後の艦娘に手を助けようとした時に起きた。

獣の様な咆哮と、共に1人の艦娘が襲いかかってきた。

提督は直ぐさま振り返り、襲いかかってきた艦娘の手首を掴み、その勢いのまま反対側に放り投げる。

投げつけられた艦娘は、受け身が取れずそのまま地面に激突する。

「っ…めろ…」

提督が助けようとした艦娘が、辛うじて聞き取れる声で呟く。

しかし、我を失った彼女にはその声は聞こえなかった。

「アアA A ああアあ嗚呼アA a アアアアアあああ嗚、あ呼嗚呼、

アア、ア、ア、A、!!!」

声にならない咆哮をあげると直ぐさま四つん這いになり、再び超低空で提督に飛びかかる。

「ぎわる、うなア、ア、ア、ア、アア、アアア!!!」

「ツ…メロオ!!」

提督に回避され、そのまま壁に突っ込み、鈍い音が部屋に響き渡る。頭から血を流しながらも、再び提督に飛びかかろうと低姿勢になる。

「わ、だ…じ、のお……」

「もう…いい…」

「天龍ちゃんにぎわるアアAアAアAアAアアア!!!」

「ダツダAアAアAアAアA!!!」

再び低姿勢で飛び込もうとした瞬間、龍田の目の前に一瞬にして提督が移動する。

いきなりの事に龍田の身体は一瞬動きが止まる、その瞬間に見えない提督の下段蹴りが龍田の顎に入り、龍田の意識を奪った。

瞬間、左右から別の艦娘が飛びかかって来た。

左側は鉄パイプを振りかぶった叢雲、反対側は拳を振り上げだ摩耶だった。

大破状態で精神力も擦り切れ寸前でこの気迫、不謹慎ながら軽く感嘆し、鉄パイプを軽く上体を動かすことで躲し、摩耶の拳を右手で軽くいなすと、2人はそのまま地面に倒れこんだ。

本当に最後の気力だったのだろう。

改めて天龍のところに行き杭を抜く。

天龍は少し顔を歪めたが、声を出さずに耐え切っていた。

「ず、ずまつ…ガハツ、…ねえ」

「無理に喋るな、後は休め」

提督は、天龍に軽く当て身をする、すんなりと意識は闇に落ちた。

この状態では、気が気でないだろうかと思ひ、半端強制的に意識をたつたのだ。

「こないのか？」

天龍を優しく抱きながら、死角の机に隠れている艦娘に声をかける。

そこから出てきたのは、自分の足に刺さった杭を手に持った曙だった。

「…あん、たじゃない」

ふらつきながらも、曙は確固たる意志で、隻腕の提督を見据えて続けた。

「あんだ、じゃ…ない。わた…ぐつ……じは、アイツら…に…だから…」

言いながらも限界がきたのか、倒れこむ曙を正面から抱き込む。

「さわ…んなあ…クソてい…」

そのまま曙の意識が飛ぶと同時に、隣部屋から川内の声が聞こえる。

提督は片手で曙を抱えると、隣の部屋に移る。

其処には川内を筆頭に、艦娘だけで構成された救護班が、囚われた艦娘達を救出しているところであった。

どの艦娘も険しい顔をしていたが、一生懸命に被害者を励ましながら、一歩でも早くここから連れ出そうと動いていた。

「提督、終わりましたか」

「ああ、こちらも頼む」

「了解しました」

川内は提督から曙を受け取ると、近くの救護班の艦娘に声をかける。

声をかけられた艦娘は軽くなづくと、提督の向かって歩いてくた。

「お久しぶりです」

「久しぶりだな、鳳翔」

「そちらの部屋の艦娘達、かなり酷い状態ですね？」

「ああ。早急に頼む」

「任せてください。治療班に北上さんもおりますので」

「そいつは頼もしい」

鳳翔はふわりと笑うが、提督の右腕を見て少し悲しそうな表情を作るが、直ぐに表情を引き締めて、他の救護班の艦娘に声をかける。

「翔鶴さん、筑摩さん、神威さん、明石ちゃん、不知火ちゃんはこちらをお願いします」

呼ばれた艦娘達は返事をする、奥の部屋に入っていく。

「それでは、後ほど」

鳳翔も敬礼をすると、奥の部屋に消えていった。

1章―4 吹雪

事件から一週間後、特型駆逐艦・吹雪は目を覚ます。

見知らぬ天井。まず最初に溢れ出した感情は絶望。

(私は…死にぞこなったのか…)

ふと身体を動かこそうとした時に、視界がダブリ、枕に再び頭が戻る。

(上手く…動かない)

鉛のように重い腕を動かして、立ち上がろうとした時に、ふと横から声が聞こえる。

「まだ動かない方がいいよお。傷は完全に完治してるけどねえ」

頭を動かして自分の横を見ると、そこにいる久しぶりに見る顔に、吹雪は目を見開く。

「それ以上に心がズタボロだねー。流石に私は管轄外だわー」

怠そうに喋る艦娘。

吹雪は彼女が喋るまで全く気配を感じなかった。

たった50cmほどの距離なのに。

「まあ、でも起きたなら悪いけど、鎮守府の出来事を話してもらおうよお。辛いかもしれないけど、状況確認が必要だからねえー。あ、喋れる?」

「北…上さん…」

そこに座っているのは、軽巡艦北上。

「お?大丈夫そうだねー。意識問題なし。んじゃ、書記ちゃん呼んでくるからちよつと待っててえー」

彼女は立ち上がると、立て掛けてあった松葉杖を手に取り、膝から下がない右脚がわりに杖をついて部屋を出て行く。

吹雪はそれを見送ることしか出来なかった。

(みんなは…)

少しすると、カツンカツンと松葉杖の音と、2人分の足音が近づいてくる。

その音がドアの前で止まると、ノックと共に返事を待たずに扉が開く。

1人は先ほど出ていった北上。もう1人は、長身で、腰まである綺麗な黒髪を揺らしながら綺麗な動作で礼をする大淀であった。

「おまたせえ」

「失礼します」

北上は先ほどと一緒の椅子に座り、大淀は立て掛けてあった、折りたたみ式のパイプ椅子と机を拡げて、机の上に持ってきた書類と筆記具を置き座る。

「月並みの事を言うけどー、思い出すだけでも辛いと思うけど、吐き出すだけでも楽になるからさあー。ま、報告すべきではない事は書面上は伏せとくから、気楽に話して」

「あ、あの…他のみんなは…?」

「あ、伝えていなかったねえー、ごめんごめん」

北上は優しい顔で吹雪に向けた。

「みんな無事だよ。誰一人かける事なく、私の元提督がみんな無事に救出したから。安心して良いよ」

そつと寝たままの吹雪の頭に手を置き、壊れ物を扱うかの様に優しく撫でる。

「がんばったね」

その一言で、吹雪の目からはポロポロと涙が溢れ始めた。

大淀はそつと立ち上がり、静かに部屋を立ち去る。

静かに涙を流す吹雪の頭を、北上は涙が止まるまで頭を優しく撫で続けた。

――

しばらくして、ポットとお茶のセットを持った大淀が戻ってくる。

北上はベッドの横のボタンを押して、吹雪の上半身の部分だけを起こす。

少し驚いた顔をした吹雪に、北上は悪戯に成功した様な顔で話しかける。

「凄いでしょー?最新式の介護ベッドなんだよおー。あ、お茶自分で

「飲む？」

「は、はい。大丈夫です」

「それは良かった。ちなみに足下のここを前に移動させたら机になるんだよおー。ここは手動なだけどねー」

言いながら机を前にスライドさせて、その上に大淀が淹れたてのお茶を置く。

「さて、落ち着いた所で申し訳ないけど、話してもらえるかな？」

「…はい」

大淀が座るのを見て、吹雪は舞鶴鎮守府で起きたことを語り始めた。

前提督と吹雪は一年程の付き合いであった。

前提督が舞鶴鎮守府に着任するという事で、吹雪が初期艦としてつけられたのだ。

前提督は真面目ながらも人当たりが良く、吹雪にも優しく接してくれていた。

お互いの関係もかなり良好であった。

舞鶴鎮守府の開設日の3ヶ月前、吹雪と前提督は鎮守府に着任、開設日までに事務仕事、新しい艦娘たちの着任式、開設日にある式典準備などの追われて慌ただしい毎日だった。

でも、その毎日が楽しく、充実した日々であった。

式典が終わり、艦娘達とも打ち解けあい、監査官や教育していた他の鎮守府の前提督もいなくなったとき、変化が起きた。

最初の変化は、本当にわからないものであった。

少しずつ、本当に少しずつ、戦果が悪くなっていたのだ。

正確には、戦果ではなく損傷が増えていった。

それまでは問題なく行なっていた遠征任務や海域の警戒任務等で、たまたま練度の弱い艦娘がいる時に限り、強い敵に遭遇する様になっていた。

そしてある時、仲間をかばうために重巡艦や戦艦が大破。火力の高い艦娘達の修復時間が長い為、まだ練度の低い艦娘で安全海域を見回りをさせていた。

しかし、見回り中の艦娘が、はぐれの重巡型の深海棲艦に襲われ、探索中の艦娘が大破し、どうにか逃げ帰ってきた。

安全区域での敵艦との遭遇、また入渠が主戦力の艦娘が入渠中のため、直ぐには使えないと吹雪は提督に報告する。

提督は少し思考したのちに、何処かに電話を入れて、吹雪に指示を出した。

「時間のかかる艦娘たちを一旦他所の鎮守府に送って、入渠させてもらおう。今、車両の手配はしておいた。」

そこまで伝えると一旦言葉を区切り、艦娘名簿と海域を見比べる。

「報告によると重巡型が2隻か…吹雪はすまないが、今出撃できる練度の高い艦娘を連れ、安全海域に出たはぐれの撃破に向かってくれ。入渠の件は私が手続きしておく。また一度海域の見回りをしてくれ、何か可笑的い…一応こちらからも本部に増援要請を送るよ」

吹雪は命令を伝達すると敬礼をして、直ぐに自分を含めた練度の高い艦娘達と海域に出た。

鎮守府で始まった悪意の渦に気づく事なく…

――

問題の海域に到着する。

吹雪を旗艦として続くのは、天龍、龍田、初雪、叢雲そして那珂であつた。

「…妙だな」

天龍の言葉に、吹雪は心の中で同意した。

海が静かすぎる。

さらに言うと、近辺には何も見当たらない。

一度地図を広げて場所を確認するも、報告にあつた場所に間違いはない。

「…逃げた…かな？」

「とりあえず、警戒しつつ周辺を分散警戒しましょう。北方向を私と那珂さんと初雪ちゃん。南方向を天龍さんと龍田さんと叢雲さんで」
全員が頷き、左右に分かれる。

その瞬間、龍田の背後を追走しようとした叢雲の足元が爆発した。

「きゃあっ！」

「なっ!？」

「叢雲ちゃん!？」

直ぐ様に天龍は反転し、大破した叢雲の前に。龍田は叢雲を支える。

「や、やだ：ありえない：」

「皆さん!!分散してください!!」

「クソがつ！」

「天龍ちゃん!!」

波状攻撃を警戒した吹雪が叫ぶが、直ぐ様に間に天龍が被弾。

直ぐ様に吹雪、那珂、初雪は天龍の被弾箇所から予測して魚雷を撃つが、牽制程度。

続けて来た魚雷に、天龍が大破。更に天龍を庇った龍田が中破する。

「対潜装備がないこの状況は不利です!!天龍さん達を護衛して撤退します!!」

「了解っ!!殿是那珂ちゃんに任せてっ!!どつかあーん!!」

「ん、いきまます」

那珂が天龍達の前に移動し魚雷を発射、初雪も牽制しながら叢雲に近づき、吹雪は天龍お龍田のフォローに入る。

吹雪達の命懸けの逃走劇が幕を上げた。

――

吹雪、小破。

初雪、中破。

叢雲、大破。

天龍、大破。

龍田、大破。

那珂、中破。

命からがら逃げ延びた吹雪は、他の艦娘に直ぐに入渠場へ向かう用に支持すると、足早に提督室へと向かった。

今回の一件、完全にこちらの行動を先読みされている。全てにおい

て。

ありえない。あまりにも完璧すぎて、ありえない話だ。まるでこちらの行動が全て筒抜けではないか。

いや、違う。

筒抜けなのだ。

吹雪は提督室の前まで行くと、ノックもせずに部屋の中に入る。

真面目な吹雪の行動に、執務中の提督は驚いた顔をするが、真面目な表情を見るや否や直ぐに顔を引き締める。

吹雪は一度辺りを見回し、盗聴の可能性を考えて提督の手を取り、バルコニーへと出る。

「司令官、緊急事態です」

「どうした、吹雪」

「お耳をお借りしても？」

吹雪の言葉に提督は少し姿勢を落とす。

吹雪は、提督の耳元に顔を近づける。

「内通者がいます。しかも恐らく深い場所に」

「なに？」

「先程の出撃、重巡艦2隻との報告でしたが、私達が現場に向かうと、潜水艦による待ち伏せの奇襲を受けました。対潜装備がない我々は一方的に攻撃されましたが、どうにか撤退することが出来ました。しかし、私以外は中破、大破です」

「そこまで報告すると、一呼吸置き、吹雪は確信をもって、提督に進言する。

「偶然にしては出来すぎています。内通者がいます。隊員か艦娘か、もしくは偽装した深海棲艦か。盗聴の可能性もあります至急調査隊を要請しましょう」

「そこまで伝えると、吹雪は一步下がり、提督の顔を見る。

「普段優しい真面目な提督の顔は怒りに歪んでいた。

「正義感が強い彼の事だ。当然の反応である。

「吹雪、1つだけ訂正させてくれ」

「…はっ」

「艦娘達の中に内通者はいない。それだけは確実だ」

「っ…はい！」

提督の信頼に吹雪は感動に震えながらも、力強く頷く。

そんな吹雪を見て、提督は吹雪に微笑み返す。

「とりあえずは吹雪も入渠場に向かつて傷を直してきてくれ。それから今後の話をしよう」

「了解しました、司令官。ちよつとだけ、お休みします」

吹雪は提督に敬礼すると、入渠場に向かった。

――

「あれ？」

入渠場に入った吹雪は、更衣室を見渡す。

先に行つたはずの艦娘達が誰も居ないのだ。

人が居た形跡はあるも、誰も居ない。

吹雪は疑問に思い、更衣室の奥側を覗くと、1番奥に開いているロッカーを見つめる。

（誰かの閉め忘れかな…っ!?!）

ロッカーを閉めようと近づいて、中を覗き込み、吹雪は驚愕した。

開いたロッカーの下に、地下へと続く階段があつた。

（な、なにこれ…?）

吹雪の中に困惑と恐怖感が生まれる。

この階段は何だ。何故今まで気づかなかつた。この先には一体何が。

居なくなつた艦娘達はこの先にいるのか。

生唾を飲み込むと、吹雪は決心して、足音を立てないように恐る恐る階段を下つて行く。

直ぐに提督に報告すべきだが、何があるかわからない。

もしかしたら提督の身に危険が及ぶ可能性がある。

安全性を確認してから報告するべきだと、一歩ずつ一歩ずつ慎重に進んで行く。

階段を降りると直ぐに扉があり、その扉は開け放たれていた。

その後もいくつか扉があつたが全て開いており、扉を抜ける度に空

間は広がっていった。

(い、一体何なの…)

積もり続ける恐怖感を必死に抑えながら、吹雪は進む。

震えながらも一歩ずつ進むと、大きな鉄の扉の前にたどり着く。

ここが最後なのだろうか。今までと違い、その扉は閉ざされていた。

しかし、鍵はかかってないようだ。

吹雪は、その扉にふれようとして、身体を膠着させた。

(な、何の音…?)

奥から聞こえてくる微かな音。扉に耳を当てるが、何なのかは全くわからない。

吹雪は右手にのみ艦装を展開して、強く握りしめる。

何度か深呼吸をして心を落ち着けると、汗ばんだ左手でドアノブに手をかける。

分厚く重いドアを少しずつ開いて行く。

微かに聞こえていた音の正体が明らかになり、吹雪は蒼白になり、勢いよく扉を開け放つ。

悪臭、嗚咽、鎖の音、苦悶…

壁に繋がれてるのは仲間の艦娘達。

理解不能理解不能理解不能。

吹雪の思考は停止し、身体に力が入らずに膝から座り込んでしまふ。

しかし、更に奥にある部屋からの音で直ぐに意識を取り戻し、歯を食いしばりドアに駆け寄り開けはなつ。

其処には白い頭巾を被った人間達が、天龍と龍田を壁に縫い付けているところであった。

2人は意識が無いのか、壊れた人形のように動かない。

「う、うわああああああ!!」

絶叫とともに、握りしめた12.7cm連装砲A型

を白い頭巾の人間達に向ける。

しかし、咄嗟に出されたものを見た瞬間に吹雪は止まってしまふ。

あろうことか、初雪と那珂を盾として吹雪の前に出したのだ。

「あつ、あ…あああ!!」

「ダメじゃ無いか吹雪？人に武器を向けては」

「……………え？」

今ここに居ないはずの声。ありえない。そんな、そんな事。あつてはならない。

吹雪はゆつくりと背後を振り向く。

其処にはいつもの優しい笑顔を浮かべた提督が立っていた。

1 章―6 舞鶴鎮守府防衛戦

時間は一週間前の奪還作戦に戻る。

川内たちが舞鶴鎮守府に侵入した同時刻。

舞鶴鎮守府より少し離れた海岸に、おっとりとした優しい顔つきをした、和服姿で後ろで髪を縛った長髪の女性が立っていた。

その女性の耳元では陰陽式と呼ばれる艦載機が浮遊しており、そこから音声が聞こえる。

『鳳翔聴こえるか?』

「ええ、感度は流行です。龍驤さん」

『いま、提督達が地下に侵入。他の2人も配置完了や。うちらもお仕事始めよか』

「かしこまりました」

すつと鳳翔が左手を上げると、まっすぐ伸ばした左手に1メートル程の航空甲板が現れ、更に大弓が現れる。

鳳翔は右手で矢を番える。

「龍驤さん。指揮は任せます」

『指揮何っていらんやろに…まあ、ええか。さあ仕切るで！ 攻撃隊、発進！』

「了解しました。風向き、よし。航空部隊、発艦！」

言葉と共に矢を放つと、空中で弓矢は艦上爆撃機へと変わる。

更に3本の矢を間隔をあけて空へと放つ。

鳳翔の思考が全ての爆撃機へとリンクする。

『さて、お手並み拝見と行こか?』

「ふふ…良い風ですね」

『せやなー。終わったら司令官連れて海沿いで一杯しよか?』

「申し訳ありません。この後は救出作戦に向かいますので」

『あらら、仕事熱心やなあ。ならさっさと終わらせよか』

「そうですね」

リンクした視界の中で、龍驤の陰陽式艦載機が合流する。

『それでは、蹂躪を始めよか』

龍驤の楽しそうな声に、鳳翔の唇も少しだけ釣り上がるのだった。

――

駆逐型20隻

潜水艦10隻

軽巡型10隻

重巡型10隻

軽空母5隻

正規空母3隻

戦艦2隻

合計60隻もの深海棲艦を5つに分けて潜伏させ、指揮するのは一隻の鬼。

深い白の髪と肌。その身体は華奢な女性のものであるが、身に纏うはその身体にあまりにも不釣り合いな鋼の殺意。

足の途中から下は上と打って変わって、巨大な白い手と脚で支えられた黒鉄の異形となっており、その鋼鉄の巨大な口からは白い蒸気が漏れる。

鬼の瞳は死を連想させるほど紅に光り輝く。

人類の敵。

海を蹂躪する者達。

深海棲艦の上位種である『姫』の次に恐れられる脅威である『鬼』。

泊地棲鬼は静かに前を見据えていた。

正確には他の手下の深海棲艦とリンクして舞鶴鎮守府からの合図を待っていた。

深海棲艦には無線機のような物は無いが、一定の範囲内にいる仲間と感覚を共有、また脳内に直接指示を出すことができる。

「イマイマイシイ…」

静かに合図を待ちながら、泊地棲鬼は静かに呟く。

諜報として潜伏している人間たち。

『白』と呼ばれる彼らは、昔とある『姫』により、協力すれば深海棲艦として転生させ永遠の命を約束するとの約束を信じ、味方を裏切つ

た。

何処までも強欲。何処までも傲慢。何処までも何処までも何処までも……。

「イマイマシイ……ホントウニ……」

昂ぶる心を抑えながら、泊地棲鬼は紅に輝く瞳を閉じる。

ふと、違和感を感じる。空気が揺らいでいる。

泊地棲鬼は目を開きあたりを見渡すが、特に何も見当たらない。しかし、違和感は次第に強くなる。

「……ッ!? 全軍対空防衛隊形!! 敵だ!!」

言うよりも早く、泊地棲鬼は左を向き主砲を発射。

怒号と共に空気が震え、何も見え水面に砲弾が直撃して水飛沫がある。

着弾と同時に、着地地点の空間がわずかにブレ、超低空飛行をしている敵機が見える。

姿が見えた瞬間、魚雷が発射された。

(バカナ!? 陰陽式ノ攻撃機ダト!?)

心で悪態をつきながらも味方を散開させようとするが、あまりにも近過ぎる。

泊地棲鬼とその周囲にいた深海棲艦は魚雷の爆発に飲み込まれた。

……

『こちら龍驤。大物がおるとは思ったが、えらいこっちゃ、鬼さんがおるわ。とりあえず魚雷を叩き込んだわ』

「了解です。こちらも掃討します」

敵の指揮官への奇襲の成功を確認するや、鳳翔は超低空で飛行中の爆雷機の高さを上げ、近づいていた敵艦隊に爆撃を叩き込む。

爆撃は寸分の狂いもなく、敵艦全てに直撃。

全ての深海棲艦は轟沈した。

『相変わらず清々しい精確さやなあ。恐ろしいわ』

「貴女に言われても……もう1艦隊も潰しました」

『ウチのも合わせて今ので15は逝ったか? とりあえずウチは引き継ぎ鬼さんの妨害に移るわ』

「了解です。潜水艦が居るところにはあの2人が向かっているでしょうから、私も終わり次第合流します」

『了解やー艦載機のみんな！お仕事、お仕事！』
会話しながらも鳳翔等に深海棲艦を轟沈させる。

敵の弱いところを的確に爆撃し、良くて大破。残りは全て轟沈に終わる。

通常の艦娘では1人1小隊の制御が限界である。

それを鳳翔は3小隊もの航空機を制御、さらに的確な攻撃。

才能だけでは無く、恐ろしい程の集中力、情報処理力、判断力がそれを可能にしていた。

ふと、リンクした視界の端に艦娘を捉える。

「それじゃ、そちらはお願いします」

鳳翔は呟くと、龍驤の元へと向かった。

――

突如泊地棲鬼からのリンクが切れた深海棲艦は、その場から動くのことが出来ず困惑をしていた。

そのせいで、側面より物凄い勢いで接近する艦娘に対して反応が遅れてしまった。

「遅い」

気付いた時には、時遅し。

指揮を取っていたル級はすれ違いざまに高速接近した艦娘に叩き斬られる。

艦娘はその勢いのまま、横をすり抜けホ級2隻を超至近距離射撃で轟沈させる。

更に、進行方向にいるリ級を蹴り飛ばして、反対側に跳躍。

水面に着地するや否や、刀を海中に差して爆雷を放ちながら勢いを殺して止まり、立ち上がりながら魚雷を掃射する。

すると艦娘が爆雷を放ちながら通った場所から水飛沫が上がった。

そこには力級が2隻、潜航していたのだ。

更に立ち上がろうとしたリ級に放った魚雷が命中、リ級は何が起きたかわからぬまま、絶叫を上げて轟沈する。

「弱すぎる」

正に疾風迅雷。

一瞬にして1個小隊の深海棲艦を殲滅した。
眼帯を付けた艦娘はマントを翻しながら、その場を後にする。

「いやぁー流石だねえー」

突如かけられた声に、艦娘は動揺した様子も無く、自分の隣を見て答える。

「北上姉さんこそ。もう2つ潰してきたのか？」

「うん。鳳翔さんが2つ潰してくれてたから、木曾の今ので雑魚は全滅。後は大将の所だねー」

「流石だな。しかし、私達が行く必要はあるのか？」

「今回龍驤さんが火力不足だから念のためにねー。鳳翔さんもいるから大丈夫だと思うけど、ほら、駄目押ししてやつー？」

「そうか。まあ、相手は鬼だしな。姉さん、足の具合は大丈夫か？」

木曾はちらりと、銀色に輝く北上の右脚の義足を見る。

北上は何事もない様にひらひらと手を振りながら答える。

「大丈夫大丈夫ー。むしろ前より強くなった感じー？武装も増えて、スーパージョー北上さまだよー」

「ふっ、戦闘面で姉さんの心配はしてないさ。むしろ右脚が持つかが心配だな」

「あー、人を化け物みたいに辞めてよねー」

全く気にしてない様子で北上は木曾を指でツンツンと刺す。

木曾は軽く笑いながら謝ると、北上もにへらと笑い返した。

「んじや、さっさと片付けて戻りますかー」

「そうだな、向かうとしよう」

2人はスピードを上げると、最後の場所へと向かうのであった。

――

「グッ…!!」

何度も魚雷と爆撃を受けながらも泊地棲鬼は対空攻撃を行うが、1つとして落とすことが出来ないでいた。

(…何ト言ウ捜査技術ダ…イマイマシイ…)

陰陽式の航空機に翻弄され、更に実機型の爆撃機に的確に攻撃される。

しかし、航空機の武器の搭載数は少ないはず。弾切れまで凌ぎきれば奥の手を使い逃げる事は容易だ。

そう考えて今は守る事だけに集中しようと、泊地棲鬼は急所への攻撃だけをどうにか凌いでいた。

そして、遂に敵の攻撃が止む。航空機の弾薬が尽きたのだ。

泊地棲鬼は好機と、ボロボロになった下半身の異形を切り離し着水する。

「ワタシハ…ホロビヌヅ…!」

泊地棲『鬼』は泊地棲姫『姫』と昇華する。

力が漲り、また、重装を脱いだ事によりスピードも上がる。

(コレナラー!)

最大速度で戦線を離脱しようと、目眩しに自分の至近距離を主砲で撃ち、水飛沫を隠れ蓑にしてその場を離れる。

「それで逃げたつもりなのか?」

「!?」

突然の殺気に、ほぼ反射で泊地棲姫は主砲を振るうと、金属同士がぶつかる音が響く。

「ほう、流星は姫だな」

「貴様ア…イツノマニ…!?!」

「単装砲って、何気にわびさびよね〜」

「ナツ!?!グウツ!?!」

至近距離からの発砲に、泊地棲姫は吹っ飛ばされるが、どうにか踏ん張って倒れるのを阻止する。

「まあ…主砲は…そう…まあ…そうねえ…」

「姉さん…」

泊地棲姫は歯を食いしばりながら、敵を睨みつける。

「オノレ…イマイマシイカムムストモメ…」

泊地棲姫が腰についていた球場の物を分離させると、それは重力に逆らい浮上し、泊地棲姫の周りを浮遊する。

敵は軽巡型2隻。これなら潰せると泊地棲姫は決断する。

「イマイチド……ミナゾコニカエルガイイワ……」

球体の浮遊物の口が開くと、そこから砲身が生え、北上たちを襲おうと飛来する。

「いいねえ」

「ギツタギツタにしてあげましょうかね！」

2人は不敵に笑うと木曾は軍刀を抜きながら前に突っ込み、北上は魚雷を掃射して、横に迂回する。

木曾は飛んでくる球体の射撃を交わしながら右手の軍刀をぶん投げて、串刺しにする。

更に、背後に回り込んだ球体に対して視認せずに、背後の艤装で射撃して落とす。

そこで正面に來た球体を踏んで跳躍。

踏まれた球体は海に落下し、北上の放った魚雷に当たり爆発する。

そして、空中にいた球体を左手の軍刀で斬り捨てて着水する。

「バ、バカナツガアツツ!!」

「まあ私はやっぱ、基本雷撃よね〜」

驚いていた泊地棲姫の横から魚雷が直撃する。

直ぐさまに離脱するも、心が見透かされてるかの如く移動する場所場所へと魚雷が放たれ、被弾する。

「40門の酸素魚雷は伊達じゃないからねっ」と

「合わせるぜ」

足が止まったところに、木曾と北上による魚雷の一斉掃射が放たれ、泊地棲姫は成すすべなく魚雷の雨に蹂躪される。

「ワタシモ……モデルルノカ？ アオイウミノウエニ……」

爆発の中、蒼天に手を伸ばしたまま、泊地棲姫は海中に沈んでいく。

「まあ、縁があればまた逢おう。願わくば今度はこっちでね」

北上はそう呟くと、木曾とともに陸へと向かうのであった。

――

大淀の話を、吹雪は驚きを隠せない顔で北上を見ると、呑気に茶菓子をつついていた北上は吹雪の視線に気づくと、「いいい」つとVサイ

ンを作った。

「き、北上さん。出撃できたのですか」

「そだよー？」

「で、でも足が…」

「ああ。疑問だよねー。ぶつきーは艦娘の艀装ってどこまで理解してる？」

「ぶつ、いいえ！えと、艦娘として深海棲艦と戦うために巫女だけが使える武装…でしようか」

「まあ、大雑把としてはそうだねー」

うんうん、と頷く北上に吹雪は首を傾げる。

北上は大淀の方を向くと、大淀は吹雪に向き直り、疑問に答えた。

「より正確に言いますと、艀装とは『深海棲艦に立ち向かう為に、巫女を補う武装』なのですよ、吹雪さん」

「艀装とは、戦う為に与えられた装備ではなく、戦えるように補う装備なのです」

「と…いう事は…」

「はい。例えば脚が無かろうが、腕が挽げようが、艀装を展開すれば、そこを補うように装備が展開されるのです」

大淀の説明に、吹雪は黙り込む。

腕を失っても、足を失っても、私たちは戦い続けなければならないのか。

それはー。

それはもう呪いではないか。

吹雪はその言葉を出せずに飲み込むことしか出来なかった。

1章―7 終幕

海岸沿いの道を1人の男が歩いていった。

ラフな格好で、手にはハンドバッグ。顔つきは日本人のものではなく、恐らく外国の観光人だろうか。

ふと彼は、前方に信号待ちの車椅子の少女を見つけた。

長く綺麗な黒髪に白のワンピースに上から少し厚めの紺の上着を羽織っていた。

彼女は、歩道横の歩行者ボタンに気づかず待っているようだ。

「コンニチワ」

男は気軽に話しかけると、少女は少し驚いたように顔を上げる。

男は息を飲んだ。

絵に描いた様な、控えめに言ってもかなりの美少女。

右半分は。

彼女の左半分は、大きな火傷の跡に色の違う瞳が入っていた。

恐らく義眼であろう。だから左側にあつたボタンに気づかなかつたのだ。

そして、スカートの下から脚はない。膨らみ的に脹脛より少し下が無い様であつた。

「こ、こんにちわ…」

「この信号、ボタン押しみいデスヨ」

「え?」

蚊の鳴くような声で、恥ずかしそうに返事する彼女に、教え上げ上げてボタンを押すと、彼女は「えっ?」と驚き、右目でボタンを見つけ、さらに恥ずかしそうに顔を伏せる。

「あ、ありがとうございますうございませう……」

「いえいえ、渡るのデスカ?」

「あ、はい」

「良ければ押しますヨ?」

「え?しかし…」

「オーケーオーケー!」

「あ、ありがとうございますう…」

男は少女の後ろに回ると車椅子の取手を握り、信号が変わると押し始める。

「どこに向かうのデスカ？」

「と、友達に来てて…その、その海岸で待ち合わせを…」

「なるホド…そこまで行きましょウ」

「あ、ありがとうございます…」

少女が照れ臭そうに笑ってお礼を言うと、男も笑顔を返す。

男はこんな気の弱いかれんな彼女が一体どうしたらこんな大怪我を負ったのか気になり、悪いと思いつつも好奇心に負け、少女に問いかけた。

「失礼デスが、このお傷はドチラデ？聞いてオーケー？」

「あ、はい！大丈夫です！そのっ…まだ私が小さかった頃に…空襲で…」

「そちらの足モ？」

「あ、ハイ…その…醜いですよね…」

「ノー！ノー！そんな事ないデスヨ!!あなたの笑顔は美シイ！キュートデスよ！」

「そ、そんな…ありがとうございますう…」

恥ずかさで小さくなる少女に、男は笑いながら椅子を押す。

男の心はこの可憐で可愛い少女で一杯であった。彼女の笑顔は男に刺さるものがあったのだ。

庇護欲のような、父親心の様なもの。

「に、日本語お上手なのですネ」

「勉強してきたからネ！今日の総合火力演習の為に勉強してきたゲド…」

「？何かあったのですか？」

「知らないのカイ？中止になったのサ」

「中止に…そうですか」

「ウン。ハプニングがあつてネ。仕方なしに観光していた所ダヨ」

恐らくこの少女は外にいたため、報道を見ていなかったのだろう。

更に深く聞いてこないと言うことは、軍事的な事にあまり関心がないのかも知れない。

もしくは、彼女の体の事を考えると、嫌な事を思い出すのか。

男は話題を変える事にした。

「ところで、フレンドとはどんな子なんダイ?」

「あ、女の子の姉妹なんです。呑気な女の子と勝気な妹さんで、とても仲が良いのですよ?」

「へえー。真反対の正確なのデスネ」

「はい。でも妹さんはお姉ちゃん大好きっ子で」

彼女達のことを思い出したのか、少しクスクス笑いながら話す彼女。

男もそんな彼女に癒されながら目的の場所に到着する。

海岸沿いに作られた綺麗に海が見える、デートスポットの様な場所であった。

男は周りを見渡すが、他に人影は見当たらない。まだ友人は来ていない様だ。

「あ、ありがとうございます!!」

「いえいえ、構いませんヨ?それでは」

男は少女に手を振りながら振り向くと、ふと違和感を感じて立ち止まる。

もう一度、周りを見渡すが特に変わったものが無く、再び背後の少女と目が合う。

「?」

少女が可愛く首を傾げたので、手振りでも何でもない伝え、再び前を向き気づく。

誰もいないのだ。

人っ子ひとり、車すら通っていない。

今日は総合火力演習の行われた休日である。

にも変わらず、人もバスも車もない。

彼女以外、誰もいない。

男は冷や汗をかく。

「どうかしましたか？舞鶴鎮守府の元提督さん？」

少女の言葉と共に男は振り向きざまに、ハンドバックからM1911を抜くと構わずに少女に発砲する。

「九四式やなくて、11.4mmかいな。しっかもダムダム弾とかエググいなあ、自分」

しかし、弾は少女に当たることなく、空中に浮遊した飛行機型の紙に止められる。

更に、ありえない光景に男は目を丸くする。

両足の脹脛から下が無いはずの少女が車椅子から立ち上がっていたのだ。

無いはずのスカートの下から見えるのは鈍色の尖った両足

それで器用に立ち上がる。

「声帯は機械で作つとるな？顔は精密マスクかいな？ようできとるわホンマ」

カツン、カツンと金属音を立てながら近づいてくる龍驤に、腰に隠していたククリナイフで斬りかかる。

「おいたはあかんで？」

「ッ!」

斬りかかった左手の手首から上が吹き飛ぶ。

その勢いのまま男は倒れこむが、直ぐに受け身をとって走り出す。

「声をあげんのは大したもんやなあ。で？逃げられるとでも？」

直後、男の足首から下が吹き飛ぶ。

いつのまにか動いていた陰陽式航空機が男の足を撃ち抜いていた。

ならばと歯に仕込んだ毒で自害しようとするが、式が頬を突き破り、歯を砕いて顎を止める。

「吐っかくお揃いになったのに、冷たいやつちやなあ」

「!!?!」

??声にならない叫びを上げる男に、龍驤はゆっくり近づき、皮膚に固定してあった精密マスクを皮膚ごと引き抜く。

「安心しい、殺しはせんよ？死んだらなーんもならんからなあ。そんなんおもしろいやん？」

暴れない様に式を使い両手両足を地面に縫い付けて、龍驤は変わらぬ笑みのまま手際よく止血する。

「どや？縫い付けるの好きなんやろ？良かったなあ？さてと、北上と木曾が来るまで遊ぼうか？」

そう言うと、龍驤は優しく男の頭を撫でながら笑うのであった。

――

「以上、報告終わります」

大淀の報告に、作戦会議室は静まり返る。

誰も彼もが頭を抱えていた。

一連の騒動は、表向きには深海棲艦の大規模侵略作戦によるものとして部外には情報統制し、どうにか混乱は抑えた。

それは今でも、火の車である諜報部および情報部と広報部が有能なお陰であろう。こちらはどうかなる。

問題は舞鶴鎮守府の艦娘達であった。

約半年による監禁および暴行。それも信じていた提督からのものだ。

彼女達のメンタルはボロボロであった。

今は彼女達に申し訳ないが、舞鶴鎮守府の中にある施設で休んでもらっているが、とてもじゃないが、他の鎮守府に遅れる状態では無いからだ。

彼女達は完全に人間不信および極度の男性恐怖症になっていた。

長門など一部の艦娘は折れずにいたが、心の奥ではどうか解らない。

今は間宮や、香取等の艦娘達にメンタルケアとして向かって貰っているが、所詮は付け焼き刃である。

かと言って、彼女達を戦線から離脱させる事は出来ない。

深海棲艦に立ち向かえる戦力は彼女達しかいないのだ。

更に言うとな艦娘の力は他人に譲渡出来るものではない。

突如として彼女達は目覚める。

そして、彼女達が死ぬことにより、その力は解放されるのだ。

つまり、彼女達は望むべくして死ぬまで戦いに身を置くことにな

る。

なので、軍隊では彼女達の要望を可能な限り呑むことにしていた。実質艦娘達に階級という制度は無い。ある意味特別階級てまあある。だが、艦娘のみの力は実はそんなに強くは無い。強いのは強い。しかし、元兵器の由縁か、人と繋がってこそ本来の力を発揮することができる。

艦娘達は提督の信頼関係があつてこそ、その能力を十二分に発揮することができるのだ。

そんな彼女達に対して、今回の事件は余りにも酷であつた。完全なるお通夜状態の会議室、ドアを叩く音が響く。

「閣下、大和です。提督を連れてきた」

「っ!!入れ」

「失礼します」

開かれるドアに、会議室全員の視線が集まる。

ドアを開けた大和に並んで入ってきたのは、女性にしては長身。後ろで1つ結びの腰まで届く綺麗な漆黒の髪。皺1つないキツチリと着こなした軍服の上からでも分かる引き締まった肉体。深めにかぶった軍帽から除く眼光は鋭く、中性的な綺麗な顔立ちだが、顔を横断するような一文字の傷と、右目から首の下まで続く傷が女性でありながらも更に男らしさを感じさせる。

そして何よりも目を引くのは彼女の左手であつた。

彼女の制服から覗く左手は無かつた。

正確に言えば、肘から下が無いのだ。

「お久しぶりです閣下」

凜とした声に、大元帥は昔を思い出す。

実に10年ぶりに聞く彼女の声。

「昔話に花を咲かせるつもりは無い。報告を聞こう」

淡々とした声に、隻腕の提督は僅かだが唇を上げる。

綺麗に敬礼をすると、報告を始めた。

「報告します。先ずは舞鶴鎮守府の艦娘に付いては長門以外の艦娘は現状では戦線の復帰は不可能です。辛うじて、天龍、龍田、摩耶、叢

雲は動けません」

「長門は流石と言うか：他はやはり無理か」

「はい。特に駆逐艦隊が酷い状況です。しかし、那珂のお陰でどうか助かっております」

「那珂だと？彼女もかなりの仕打ちを受けて、疲労してるのでは？」

「はい。しかし流石川内、神通の妹と申しますか、素晴らしい精神力です。姉達の生存の喜びもあつたおかげも強いと思いますが、間宮達と一緒にケアに入ってくれております」

「なるほどな。同じ境遇に居た者が入ってくれるとかなり助かるな。那珂に落ち着いたら直に例に向かいたいが可能か？」

「少し厳しいとは思いますが、彼女の調子だとそれも近いと思います。自分からも伝えておきます」

「よろしく頼む。それと別件で1つ聞きたいのだが…」

大元帥は一呼吸置くと、静かに彼女を見据えた。

『『白』を潰したとは本当か？』

「「なっ!?!」」

大元帥の言葉に会議室に集まっていた重鎮達は息を飲む。

それ程までに、『白』と呼ばれるテロリスト集団を潰すのは難しいのだ。

隻腕の提督は静かに口を開く。

「はい。殲滅と言うわけには行きませんが、全世界の全ての拠点を潰しました」

「残りは残党のみか。その為に自身を死んだことにして狩をしていたと言うことか」

「仰る通りです」

「君をしても10年か…」

「時間がかかってしまい申し訳ありません」

「良い。責めてるわけでは無い。君以外だと恐らく無理な話だ」

「ありがとうございます。それと最後に一点」

「なんだ？」

「舞鶴鎮守府前提督を殺さずに捕縛しております」

「なんだと!？」

驚きに大元帥は思わず立ち上がる。

殺さずに捕縛できたのか、奴らの1人を。

「はい。少し状態が悪いですが、意識はあります。直ぐにこちらに引き渡せます」

「了解した。よくやった」

大元帥は、落ち着いて椅子に座ると少し思考して直ぐに提督に命令を下す。

「少佐。君には悪いが、至急舞鶴鎮守府復興のために行動してもらいたい。『白』討伐の報告書に付いては後回しで良い。何よりも先ず、舞鶴鎮守府の復興に務めてくれ」

「了解しました」

「これにより、お前には今日から舞鶴鎮守府の提督を勤めてもらう。戦力として特別に君の指名する艦を連れて言って貰って構わない。大淀君も向かってくれ」

「了解しました、閣下。提督よろしくお願いいたします」

「了解です。よろしく頼む」

「それと君の階級についてだが、一応2階級特進という扱いになっていたので、今は大佐だが、功績状君が望む地位を用意しよう」

「いえ、閣下。自分は中佐で十分です」

「しかし」

「自分は剣を振るしか脳がない身。閣下に拾われたから今があるというものです」

「：君がそう言うのなら、そうしよう。すまないが舞鶴鎮守府を頼む」
提督は敬礼をすると、大和と一緒に会議室を後にする。

「大淀君も後は良いから準備出来次第に向かってくれ」

「了解しました、閣下。失礼します」

大淀は深くお辞儀すると、会議室を後にする。

大淀の退出後、会議室は心なしか少し空気が軽くなっていた。

「さて、我々は我々にしか出来ないことをするか」

大元帥の言葉に、全員は頷くのだった。

2章―着任

日本で姫が撃破されたという報道は瞬く間に全世界に報道された。さらに、撃破したのはたった4人の艦娘。艦娘達の要望と言う名目で名前は伏せられていたが、恐らく日本軍が情報統制をしたのだろう。

しかし、とてもじゃないが有りえない話だ。

たった4人で『姫』を撃破など。

各国はどの艦娘が作戦に参加したのか、手練れの諜報部隊を使い調べ上げたが、その情報の尻尾も掴む事が出来なかった。

ただ、1つだけ。関係性は不明だが、途轍もなく重要な情報を入手する。

10年前の英雄である提督が生きていると。

――

《これは意図的に掴まされた情報だろうね》

《やはり、君もそう思うかい？》

とある国の軍隊基地作戦会議室。

1人の将官の質問に対し、その場に場違いな少女は答える。

《そつちに少しでも気をそらし、艦娘への関心を無くすためだと思う》

《ならば最初から4人で姫を倒した等と公表すべきではないのでは？》

別の将官の質問に、少女は少しだけ思考し、答える。

《恐らくそれは牽制だと思う》

《牽制だと？》

《そう》

《誰に対しての牽制なんだい？》

《確信ではない》

《構わない。言ってくれ》

《『白』に対しての》

なっ！？

少女の答えにその場にいた将官達は驚く。

『白』と言えば深海棲艦に続く艦娘の、いや全世界の軍隊の敵のゲリラ

集団である。

《ここからは私の憶測になる》

《構わない》

《恐らくは、今回日本で行われた総合火力演中による深海棲艦のゲリラ攻撃は『白』の手引きによるものだと思われる。そして舞鶴鎮守の防衛戦。これは1度敵の手に鎮守府が落ちている。そうとしか思えない》

《何故だ？》

《海域の地図と敵の撃破ポイントを見て》

プロジェクターに、日本から公開された交戦図が映し出される。

その交戦位置をみて、改めて彼らは気づく。

《そう、近過ぎる。海域防衛で巡回の艦娘や偵察機が飛んでいるはずなのに、その内側に悠々と侵入されて、交戦している。そんな事はありえない》

基地防衛には艦娘以外にも見張りの兵隊がいるのだ。

これだけの数を1度に見落とすなどあるはずもない。

《と言うことは、舞鶴鎮守府は総火演の時には既に落ちており、艦娘達も監禁状態にあった》

《さらに、その時には深海棲艦は基地近辺海域まで侵入し、内通者の手引き待ちと》

《そうなる》

《しかし、それで何故『白』の牽制に？》

《これが彼らにとつての最後の可能性だったからと考える》

《最後の可能性？》

《彼らのこれまでの行動でここまでの大きな作戦はなかった》

襲撃や拉致監禁等があったが、基地を丸々占領される事など本来は不可能である。

ここまでの大規模な作戦。

例えやれたとしても成功率等相当低く、成功したとしても被害は甚大で長くは持たない。

それは何に対してもそうだが、一回行えば対策は取られる。

それでも行つたと言う事は、後が無かつたと言う事だ。

《なるほど、10年間も身を潜めていた彼女が出てきたと言うのは》

《『白』の重要拠点を潰し終わったから》

《さらに彼らが繋がっているであろう深海棲艦のましてや姫がたった4人に潰されたとなると》

《残り少なくなつた彼らは迂闊には動けなくなる…か》

《しかし殲滅した訳ではない》

《そう、だから作戦を潰した艦娘に被害がいかないように名前を伏せていると思われる》

《しかし、名前を公表した方が罨を貼りやすいのでは？》

確かにそうだ。見張る対象を絞つた方が対処しやすい。

その言葉を聞いた少女は、言いづらそうに少し目を逸らす。

その挙動に、男達は首を傾げる。

《何かあるなら言ってもらつても構わないよ？あくまで憶測なのだから》

《その…恐らくだけど》

《ふむ》

《単に目立ちたくなかつただけかもしれない…》
《……》

会議室に沈黙が流れる。

少女は恥ずかしそう顔を伏せる。

その場合、彼女が語つた半分の話が無駄になる。

《まあ…確かに…》

《恥ずかしがり屋の艦娘とか居るしな》

《ど、どっちにしても日本にアプローチしない限りは分からぬか》

《しかし有り得るのか？数も規模も解らぬゲリラ集団の拠点を全て潰した等と》

《それが本当だとしたら、我が国も日本に多大な貸しが出来てしまつたと言う訳だしな》

《恐らく残党の件もあり、こちらからの信頼できる人材を待ってるかもしれないしな》

《そうだな。何にしろ一度日本に使者を送るか》
男達のフオローにさらに縮こまりながらも、少女は手を挙げて答える。

《その役目、私がやっても良いだろうか》

《そうか：確かに一番は君が適任だな》

《私も彼女以外に適任はいないと思うよ》

全員が同意しながら頷く。

《それと、もう一つ。みんなにお願いがある》

少女の言葉に、室内の男達の目が見開く。

彼女との付き合いは長いが、彼女からお願い事をされる事など、今までなかったからだ。

《なんだ、君が願いたい事何って珍しい》

《はっはっはっ！何でも言ってくれて構わんぞ》

《欲しいものもあるのか？言ってみなさい》

真剣な空気だった会議室は一気に孫をあやかしモードの和やかな雰囲気が変わる。

さつきまでの会議の内容などすっ飛んだように、彼女の頼み事をワクワクしながら待つ初老の男達。

しかしそれも一瞬の事だった。

《私を日本に移籍させてほしい》

一瞬にして会議室は凍りついた。

――

「久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだ。今日からよろしく頼む」

提督が右手を出すと、長門は快く握手を返した。

本日より舞鶴鎮守府に着任になり、こちらに一報を入れた時も彼女が対応したのだ。

「すまない。一応全員に声をかけたのだが」

「構わない。身体の調子は？」

「ああ、絶好調だ。背後の艦娘達は貴方の連れか？」

「ああ、紹介しよう」

すつと提督が横に横に避けると、背後にいた艦娘達は分かりやすいように横隊に並ぶ。

「私たちは面識ありますが、改めまして、大和型戦艦一番艦、大和です」
「大和型戦艦二番艦、武蔵だ」

「改めまして、航空母艦、鳳翔と申します」

「うちは初めましてやな！軽空母、龍驤や！よろしゅうな！」

「私も面識あるけどねー。軽巡、北上。まーよろしく」

「球磨型の本曾だ。よろしくな」

「なんだが新鮮で気恥ずかしいですね。大淀です。よろしくお願いします」

「戦艦長門だ。よろしく頼むぞ」

挨拶が終わると、武蔵が一步踏み出し笑顔で右手を差し出す。

それに対して、長門も右手を差し出して握手する。

瞬間、とんでもない轟音とともにお互いの顔面が弾け飛ぶ。

「きゃあ!？」

大淀だけが驚き尻餅をつき、龍驤と北上はニヤニヤと笑い大和は笑顔のまま。

鳳翔は頭を抑えてため息をつき本曾は長門に対して小さく感嘆の声をあげた。

2人は

「ぐっおお、流石はビッグセブンだ。頭に響く」

「っ…長門型の装甲は伊達ではないよ」

武蔵と長門はお互いに大声で笑う。

「な、何してるのですかこの脳筋共ー!!」

大淀のツツコミに、周りの者達は噴き出すのだった。

――

「何なんですか…この書類は…」

「あっはっは！不正ないの見つける方が難しいんちゃうか」

長門に提督室に案内された大淀は頭を抱え、龍驤はけらけらと笑い、大和は顎に手を当てながら書類に目を通す。

「まあ、半年もの間ですからね。吹雪ちゃんが来たら可能な限り整合性をとりましょう」

「こりゃ、武蔵達が確認に行った備蓄も全部あちらさんに行つとるやろなあ」

「考えないようにしていたのに言わないでくださいよ…本部支給の準備が出来るまでは本当にギリギリの運営ですね…しかし設備は無事どころかしっかりと手入れされていたのは何故でしょう」

「恐らく深海棲艦の拠点にでもするつもりやなかったんか？」

「実際そうでしょうね。姫が出たと言うことは、そこから侵攻するつもりだったのでしょうか」

実際にそんな事になれば、日本は終わっていただろう。

大淀はその話にもしもを考えてゾツとする。

しばらくすると、ドアをノックする音が聞こえ、入室を促すと補給庫に向かっていた武蔵、木曾、そして吹雪が入ってくる。

「どうでしたか？」

「案の定空っぽだ。殆ど備蓄はないな」

「あれ？他のメンツはどないしたん？」

一緒に行った筈の提督がおらず、龍驤は武蔵に問ひ返す。

「提督は鳳翔と問宮の方に向かったよ」

「北上姉さんは営内に向かった。艦娘達の状態を見てくるらしい」

「あつちには今香取さんと川内さん達三姉妹がいますので、話を伺いに行くそうです」

「わかりました。あ、吹雪さん。申し訳ないですが、書類の整合と確認一緒にお願いできますか？」

「あ、はい…」

吹雪は暗く俯いて、申し訳なそうに大淀の方に向かう。

この不正書類の殆どは吹雪が前提特に命令されて作ったものだった。

横を通り抜けようとした罪悪感で押しつぶされそうな吹雪の背中を、龍驤は力一杯叩いた。

「気合いいれんかい!!」

「つぴゃい!？」

突然の事に吹雪は情けない声を出して涙目になりながら背中を摩る。

吹雪の声に提督室の面子は大笑いし、吹雪は軽く頬を赤らめる。

「暗い気分で仕事してもはかどらんで!!自分がようわかるんやから頼むで!!」

「は、はい」

「声ちつき!!」

「はっ、はい!!」

龍驤はにししと笑いながら、今度は軽く吹雪の背中を叩く。

そんな吹雪の右肩を大和が、左型を大淀が軽くてを乗せる。

「頼みましたよ」

「書類仕事、逃げれると思つたら大間違えですからね」

笑いかける笑顔に、吹雪も少しだけ笑顔になるのだった。

ただ、大淀の笑顔は本当に獲物を逃さない笑みだったので、少し引いてしまうのだった。

――

どうしてこうなった。

なぜか龍田はいま天龍と一緒に厨房の手伝いをしていた。

最初は長門から今日から提督が着任すると聞き、天龍が提督に礼を行くと言いだしたので、必死に止めていた。

また私たちが騙しているかも知れない。

また裏切られて酷い目にあうかもしれない。

だから辞めろ。

行くだけ無駄だ。

何が何でも行かせないと腕を引っ張る龍田に向かい合い、天龍は困ったように笑いながら答えたのだ。

「アイツなら大丈夫さ」

何が大丈夫なのだろう。

その根拠は一体どこから出てくるのだ。

見た目によらずどこまでもお人好し。

その左眼を完全に失ってしまったのもヤツと同じ人間のせいだと言うのに。

それでもチビ達を助けてくれた義理を果たすと言う天龍の言葉に反論出来ず、しかし一人にするわけにも行かずと渋々と付いてきていた。

営内から出て、提督室のある隊舎に向かう途中、こちらに向かつてくる長門と松葉杖をついた北上に出くわした。

「おお、北上。久しぶりだな」

「やあー天龍に龍田、久しぶりい」

「あらくお久しぶりね」

「2人とも何処かに行くのか？」

長門の質問に一気に不機嫌になる龍田の様子を見て、長門は笑いながら答える。

「提督なら鳳翔と一緒に食堂に向かったぞ。食事の手伝いが必要か見てくるそうさ」

「そうか、ありがとよ」

「ところで、営内はどんな状況なのさ？」

北上の質問に、若干天龍の顔が曇る。

「比較的に那珂のお陰でだいぶマシだが、羽黒と霰、山風がヤバイ。特に山風に至ってはやつとさつき落ち着いたところだ。叢雲もまあ大丈夫だが、摩耶はダメだな。多分提督と顔を合わせた瞬間に殴りかかる」

天龍は一度言葉を止め、真剣な表情になり北上に質問する。

「俺たちは隣に閉じ込められていたから知らなかったが、那珂が羽黒やチビ達の身代わりになっていたって本当か？」

「うん、吹雪の話によるとねー。一生懸命自分に注意を引いて、自分以外は最小限の被害にしていたみたい」

おかげで本人は酷い有様だったけどと続ける北上の言葉に、天龍は頭を抱え、隣の龍田からはものすごい怒気が放たれる。

「那珂は凄い。そんな状態でも他の艦娘を気にかけて、今もその子達の為に世話を焼いている。我々の自慢の仲間だ」

長門言葉に、天龍は少し微笑みながら頷き、龍田も少し落ち着く。「それに、助けてくれたアイツにも礼を言わないとな。それじゃあな2人とも」

片手を上げて別れを告げると、天龍と龍田は食堂へ向かうのだった。

2章―復讐者

食堂に入ると、奥でせつせと間宮と鹿島が昼食の準備をしていた。そして、意外な事にそこには曙の姿もあった。

入ってきた提督に気づいた間宮達は一度手を止めて、提督達の元とに来る。

「お疲れ様です提督さん」

「提督さん、お疲れさまです。練習巡洋艦、鹿島です。よろしくお願ひします！」

「ああ、間宮、鹿島邪魔してすまない。人出が足りないと思い鳳翔と手伝いに来た」

提督は鹿島の後ろに隠れた曙に目をやると、少し震える。

しかし、覚悟を決めたようにぎゅっと目を瞑って一歩前に進むと、目を見開き提督を見る。

「と、特型駆逐艦曙よ!!…そ、その…助けて…くれてありがと!!」

ガバツと頭を下げる曙に、提督と周りの艦娘は眼を丸くする。

「…私が怖くないのか?」

「…え?」

提督の質問に対して曙は顔を上げて素直に疑問の言葉を漏らす。

「怖い?」

「お前を酷い目に合わせた人間…提督とだぞ?」

提督の質問に曙は心底訳のわからないと言う顔をして答える。

「何言ってるの?アンタとあのクソは別人でしょ?助けてもらったア
ンタに感謝はすれど恨みなんか無いわよ。そ、それに…かっこよかつ
た…し…」

自分で言いながら恥ずかしそうに小声になる曙に鹿島が黄色い声
をあげながら抱き着く。

「きやああああああ!!曙ちゃん!!本当カッコいい!!可愛い!!かっこ
可愛い!!」

「つちよ!?や、やめて!!間宮さんも鳳翔さんも笑ってないで止めてよ
!!黙って頭撫でんな!!クソ提督っ!!」

「……………」

「だからってポンポンしろって事じゃないわよ!! 触んなっ!! クソ提督うう!!」

曙は暫くもみくちやにされるのだった。

「……………」

「な? 大丈夫つつつたる?」

「……………」

一部始終を見ていた龍田は笑いながら龍田を見る。

龍田は不貞腐れた様子で提督を睨んでいた。

「とりあえず中に入ろうぜ。おい提督!!」

「あ、ちよつと!! 天龍ちゃん!!」

大きく手を振りながら食堂に入ってくる天龍と龍田に、全員の視線が行く。

その好きに曙は鹿島の魔の手から逃れ、間宮の背中に隠れて威嚇態勢に入っていた。

鹿島の残念そうな顔に天龍は苦笑いしながら、提督に話しかけた。

「よお、提督。オレの名は天龍。んで、こつちが妹艦の龍田だ」

「……………」

「ほら、龍田!! 挨拶しろ!!」

「お、怒らないでよ……龍田よ」

龍田は渋々提督に挨拶する。

そんな龍田を見ながら天龍は軽くため息を吐くと、真剣な表情で提督に向き直る。

「提督、俺からも礼を。ありがとな、助かった」

「私の仕事だ。気にする事はない」

「いや、それでもだ。俺に出来ることがあつたらなんでも言ってくれ。力になる」

「そうか、なら早速頼まれてくれるか?」

軽く頭を傾げる天龍に対して、提督は厨房の奥を指差す。

「昼食の準備を手伝ってくれ。この人数なら直ぐ終わるだろう」

天龍は一度呆けた顔をするが、直ぐにニヤリと笑い胸を張って提督

に言う。

「おう!!任せとけ!!龍田も行くぞ!!」

「ちよつと?!天龍ちゃん!」

「そうですね、これだけ居れば大丈夫だと」

「久しぶりに腕がなります!!」

「提督は戻っていただいで大丈夫ですよ」

「ぐるるる…」

龍田を引きずる天龍を筆頭にぞろぞろと厨房へと入って行く。

曙はまだ威嚇していた。

それを眺めていると、不意に厨房から天龍が大声で叫ぶ。

「提督!!今演習場に摩耶と恐らく叢雲がいる!!頼むわ!!」

その言葉に提督は軽くてを上げて答えて、食堂を後にした。

—————

「ちっ!!」

舌打ちと共に轟音が鳴り響いて、水面に浮いた的に的中する。

かれこれ1時間ほど摩耶は演習場に籠っていた。

思い出すは屈辱の日々。

忌々しい。忌々しい。忌々しい。

ギリギリと歯を噛み締め、標的へとゴム弾を連射する。

蓄積された憎悪は収まらなかった。

—————

摩耶が監禁されたのは提督と出会い3ヶ月ほどの事だった。

新しく着任した山風と霰を連れての鎮守府の近辺海域の警戒任務

中にはぐれのイ級2隻とロ級2隻を発見。

摩耶は20・3cm連装砲で、敵の射程外から早々にイ級2隻を撃破する。

残りのロ級を実戦経験を積ませる為、山風と霰の2人に指示を出して攻撃させた。

2人は拙い連携ながらもどうにかロ級2隻を撃破。

「よっしゃあ!!やったな!!」

摩耶は自分のことのように喜びながら2人を褒めようと前進する。

瞬間、何が脚を抑え、摩耶の足元から爆発が起きた。

「ガアッ!」

爆風の中、摩耶は自分の足元を見る。

そこには自分と同じく、黒い煙を出しながらも、自分にしがみ付く深海棲艦の姿を見た。

その目が紅く光る。

(潜水艦だ?!?コイツ、自爆する気か)

ギリギリつと音を立てながら敵の後ろにあり主砲が摩耶を狙う。

「ふっぎけるなあっ!!クソがアアアアアアアア!!」

摩耶は足元に向けて、右手と左手の主砲を放つ。

至近距離での爆発。摩耶にも爆発の衝撃が直撃する。

しかし重巡かである摩耶の方が装甲では有利。敵潜水艦力級は奇声をあげながら轟沈した。

「ハア…ハア…」

荒い呼吸をしながら水面を睨みつける。

摩耶自身は大破したが、どうにか敵を殲滅する事を確認する。

「帰投する…か、帰るぜ…」

心配そうにする山風と霰に支えられながら、摩耶達は鎮守府に向かった。

鎮守府に到着すると、予め通信を入れていたからか、前提督が心配そうな顔で待っていた。

自信の油断が招いた結果だったので、申し訳ない気持ちがいっぱいであったが、前提督があまりにも心配するものだから、摩耶は気持ちがだいたいぶ楽になる。

「提督…お前ちよつと、ウザい!」

摩耶が笑いながら軽口を叩くと、全提督も苦笑いし、早く入渠してこいと言われた。

摩耶も軽く手を挙げて答え、山風と霰に報告を頼み、入渠場に向かった。

入渠場に入ると、摩耶はそういえば昨日は長門が入渠していた事を思い出す。

「あちゃー。笑われっかな」

ため息を吐きながらロッカーを開けようとした時、突如前進に電流が走る。

摩耶の意識はそこで途切れた。

――

身体が揺れる感覚。

手と脚に違和感を感じる。

だが瞼は上がらず、自分の身体では無いような鉛のような重さ。

摩耶の思考は定まらず、意識は朦朧としたまま。

何時間が経ったであろう、突然の衝撃に摩耶は目を覚ます。

「……は？」

摩耶は見知らぬ場所に座り込んでいた。

顔を上げると、目の当たりに穴が空いた頭巾を被った体格の良い男が2人経っていた。

片方の男の手には木製のハンマー。もう1人の手には短鞭のようなものが握られていた。

(な、なんだ…?)

頭が回らない中視線を動かしてみると、薄暗い少し奥に見知った顔を見つけ、一気に覚醒する。

そこには、長門がいた。

その両手と両足は釘で打ち付けられていた。

「な、なががあっ!?!」

名前を叫ぼうとした瞬間に、摩耶は短鞭で叩かれる。

「静かにしろ」

何度も、何度も、何度も。

顔に強烈な痛みを感じる。

防ごうとするも、腕も足も動かない。

歯をくいしばり、殴られながらも自分の足を見ると、長門と同じように釘で打ち付けられていた。

薬か何か使われているのか、手足の痛みは感じない。

「許可なく喋るな。わかったか」

静かに見下ろしながら見下ろす男。

何十発殴られたか分からないが、摩耶の顔は原型がわからぬほど腫れ上がっていた。

摩耶はどうか顔を上げる。

「ペッ」

口の中が血塗れで声が出ない中、摩耶は血を男に向かって吐きつける。

血がついた男は、何も言わずに摩耶の顔面を蹴り上げた。

そこで摩耶の意識は途切れた。

――

もう何日ここにいるか解らない。

毎日男達にやる暴力は続いた。

摩耶自体も酷いが、視線の先にいる長門も酷い有様だ。

摩耶よりも早く入っていた彼女は、自分よりもこの地獄を長く味わっていたのだ。

しかし、長門の目は死んではいなかった。

黙々と黙って暴力に晒されるが、長門は声一つ出さずに耐え抜いていた。

なので自分が折れてはならない。

負けてたまるものか。

こいつら全員、絶対に殺してやる。

私の手で殺してやる。

摩耶は顔を掴まれて、顎の力が入らない口を無理やりに開けられ、猿轡を付けさせられる。

目の前の残飯を男達が踏み潰し、摩耶の口に無理やり押し込む。

吐きそうになるのを意地で我慢する。

吐いたらその吐瀉物をまた口の中に入れられるからだ。

笑いながら摩耶の腹を蹴る男。

汚物を見る目で頭を殴打する男。

意識が飛べば水をかけられ、時には電気を流され、意識を放すのを許されなかった。

気づけば、長門と自分以外の艦娘が繋がれていたが、摩耶は気にすることができなかつた。

それ程に、彼女の殺意は膨れ上がっていた。

この痛みは全て返してやる。

楽には殺しはしない。必ず、必ず、全て返してやる。

――

ふと意識が覚醒する。気づけば意識を無くし、また覚醒する。いつもの事だけだ。

しかしその時は違った。

身体に違和感がある。虚ろな目で摩耶は身体を見る。

そこには足と手があった。

ふと疑問が頭を過る。自分の頭の上に打ち付けられていたはずの自分の手が、何故下に？

足もよく見ると、自分と地面を繋いでいた杭が無かつた。

違和感の答えは解放された手足の感覚であつた。

朧気に顔を上げると、そこには白い制服を着た人間がいた。

ぼやけた視界が少しずつ覚醒する。

そして認識する。

提督の姿を。

ジワリ、ジワリと身体に熱が蘇る。

歓喜歓喜歓喜歓喜歓喜歓喜歓喜!!

口元に獰猛な笑みが浮かぶ。

気づけば目の前の人間に飛びかかっていた。

(殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すころすころすころすころすころすコロスコロスコロスコロスコロスコロツ)

視界は人から地面に変わり、摩耶の意識は途切れた。

――

「…クソが」

悪態をつきながら、摩耶は水面を佇む。

救出されてから五日ほどで、摩耶は目を覚ました。

そして、自分の仇が既になんかいないことを知り怒り狂い暴れまわつた。

そして長門に取り押さえられ、辛うじて落ち着きを戻した。

長門が居なかつたら、恐らく摩耶は止まることがなかっただろう。

「……クソが」

摩耶は再び小さく呟くと、練習要のゴム弾が尽きたので一度補給する為、停泊場に向かう。

虚しい虚無感に身体を動かしていないと飲まれてしまいそうで、行き場のない怒りを的にぶつけるしかなかったのだ。

ふと、視線の先にある建物から演習場に入る扉が開くのが目に入る。

(叢雲か?)

この時間帯、というかいま演習場を使っているのは、叢雲か自分。たまに長門が来るぐらいであった。

そこで彼女は演習場に入ってきた人影を目を細めて確認する。

瞬間、摩耶は爆発的に加速して陸地に近づき、そのまま水面を蹴り跳躍する。

「オラアアアアアアアアアアア!!」

最高速度による飛び蹴りを提督の正面から放つ。

(殺った!!)

とても人間が反応できる速度ではない、完全に殺す気の飛び蹴り。

しかし、提督は半身になって難なく回避。

「!?」

それどころか摩耶の脚を掴み、そのまま一回転してもといた海へと放り投げる。

「ちい!!」

艦装の能力で沈むことはないが、摩耶は四つん這いの状態で水面を滑り、停止。

そのままクラウチングスタートのポーズをとる。

「お前ガア!!」

両手でブレーキをかけ、前に推進しようとする力が両足の水面が荒れ狂う。

「お前が俺の獲物をおおお!!」

一気に手を離し、超低姿勢で爆発的な速さで水面を走る。
そして水面を蹴り、今度は回転をしながら薙ぎ払う様な回し蹴りを放つ。

提督は前かがみになりそれを交わす。

瞬間、摩耶の口元が歪む。

空中で一回転して提督の上を通過する瞬間、着水の際に装填した実弾が入った右手の主砲を提督に向けた。

前かがみになった提督には完全に死角。

仇を殺せる。

瞬間、下から生えてきた手が摩耶の襟首を掴んだ。

(なっ!?)

そのまま摩耶は力づくで引つ張られ、一本背負いの様に背中から地面に叩きつけられた。

「カツハア!!」

受け身も取れずに背中から大の字で地面に叩き付けられた摩耶は肺から息を全て吐き出し、呼吸が一瞬止まる。

全身が痺れ、動けない摩耶の首筋に提督は手刀を当て、見下ろしてゆっくりと問いかける。

「私が憎いか?」

声が出ない。

「私が憎いか?」

身体は動かない。

「私が憎いか?」

それでも復讐者は睨みつける。

目の前の敵を殺そうと。

「良い気迫だ」

隻腕の提督はゆっくり立つと、扉に向かう。

摩耶は動かせない身体に、自分の弱さに憤怒しながら、それでも提督を睨みつける。

「いつでも来い。相手してやる」

静かに閉まるドア。

摩耶はあらゆる負の感情が宿った眼差しで扉を睨み続けるのだっ
た。
その瞳は紅くギラついていた。

2章―3 記憶持ち

叢雲は提督と摩耶の一部始終を見ていた。

動けない摩耶を放置して行ったのは、恐らく自分がいたのに気づいていたからであろう。

叢雲は演習場の物陰から出ると、いまだに大の字に倒れている摩耶に話しかける。

「…手助けはいるかしら?」

「……………」

「そう」

首を横に振る摩耶の強情さに、叢雲はあきれた様子で溜息をつく。

このまま放置も後味が悪い。かと言って助けて文句を言われるのも癪なので、摩耶の足を掴んで引きずりながら設置されているベンチに連れて行き、摩耶を持ち上げて雑に下ろした。

涙目になって非難の目をよこす摩耶を無視しながら演習場を出て行った。

演習場を丁度出た所で、正面よりこちらに歩いてくる艦娘を発見する。

「よお、叢雲。もうすぐ飯だぜ。摩耶はいるのか?」

木曾が軽くてをあげながら問いかけてくる。

「摩耶なら司令官にやられてダウン中よ」

「フフツ…そうか。まあ、それなら今は辞めといたほうが良いな。そつとしておくか」

「……………」

「ん?どうした?」

黙り込んでこちらを凝視する叢雲に、木曾は首を傾げながら問いかける。

「木曾…アンタ私と会ったことある?」

「あ?初対面の筈だが?」

「…そうよね。何でかしら、アンタ…いや、アンタ達と提督に…私は見覚えがあるの…」

「叢雲、お前が艦娘になったのは何年前だ？」

突然の質問に叢雲は首をかしげる。

「四年前よ」

「そうか…ならお前とは初対面だ。とりあえず、飯早く来いよ」
「…ええ」

木曾は言いながら振り向き、軽く手を振りながら、この話は終わりだと言わんばかりにさっさとその場を後にした。

残された叢雲は、その後ろ姿を暫く見つめる。

「お前とは…ね」

誰に言ったわけでもない

――

艦娘になる前、彼女は施設で生活をしていた。

叢雲は両親がいなかった。彼女が幼い頃に他界し、施設に引き取られたのだ。

普通の少女として暮らしていた叢雲は、四年前に艦娘としての力に目覚める。

それまでただの少女であった叢雲は、自分が艦娘になったというのを瞬時に理解した。

漆黒だった髪の色は綺麗な銀髪になり、瞳の色も変わった。

そして何よりも膨大な量の【叢雲】の記憶の伝授。

その兆候を目の当たりにはした施設の係員は直ぐに軍隊に連絡、そのまま海軍へと入隊する事になった。

一応は本人の意思確認があるのだが、叢雲は二つ返事で了承した。それから、とくに私物が少なかった直ぐに準備して、施設の子供たちや役員に挨拶をし、軍隊へと出頭した。

しかし、そこで叢雲はおかしな事に気づく。

叢雲は初めて行くはずの基地に見覚えがあった。

初めて訪れる場所での既視感に叢雲は困惑した。

通常、引き継がれる記憶と言うのは兵器としての、【叢雲】としての記憶のみだ。

自分の先代である艦娘としての【叢雲】としての記憶は引き継がれ

る事はない。

理由は単純だ。

そんな事をしたら今の人格が破綻してしまう。

兵器としての性能を引き継ぐだけでも脳に膨大な負荷がかかる。

そこに、引き継いだ艦娘たちの記憶まで引き継いでいたら、脳が破壊されてしまうのだ。

しかし叢雲は、断片的にだが、恐らく前世の記憶を引き継いでいた。初めて会うはずの艦娘、初めていく場所、初めての戦闘。

夢で見た事ある様な、しかし確実に経験したことがある霞の様な記憶。

また、それとは別に決してありえない記憶を叢雲は持っていた。

暗闇の中で、心が蝕まれる感覚。

自分が自分で無くなる様な、何年もかけて自我がゆつくりと壊されていく記憶。

叫びたくても叫べず、狂いたくても狂えない。

一人取り残された深淵の中。

立ってるのか座っているのか、はたまた寝ているのかもわからず、正気のまま。

そしてその闇は唐突に終わり、いつのまにか海に沈む自分。

最後に見えるのは、自分に艦装を向ける艦娘達。

あの地獄に比べれば、今回あつた事件など、叢雲にはおままごとにしかならなかった。

あの隻腕の提督が現れるまでは。

あの提督が現れた突如、叢雲の中で2つの感情が爆発的に高まった。

1つは喜び、もう1つは怒り。

気づけば鉄パイプをもって救出に来てくれた恩人に殴りかかっていたのだ。

意味が解らないが、叢雲自体が一番混乱していた。

そして、なぜかこの攻撃は当たらないと叢雲の中では確信があった。

案の定、彼女には容易にかわされ、そこで叢雲の体力は尽きたのだった。

そのことを思い出しながら、叢雲は赤面する。

(……とりあえず、あいつには謝罪とお礼を言わなきゃね…癪だけど) とりあえずはご昼食だ。その後にあいつの、提督に話に行こう。そう考えながら叢雲は食堂に向かい歩き始めた。

――

北上は川内達と食堂に向かっていく途中で木曾に声をかけられた。北上は川内達に先に行くように伝えようと、木曾と一緒に少し通路から離れる。

「なあ、姉さん。前に言っていた記憶持ちって叢雲か？」

「お？彼女から話を聞いたのかい？そだよー。余計なことは言っていないよね〜」

「ああ、すっかり誤魔化してきた」

「おーさすが我が妹だー」

「ば、寄せ!!もうガキじゃねんだから!!」

北上が頭を撫でようとするのを、木曾は右手を挙げて防ぐ。しかし北上は木曾の腕をすり抜け、木曾の頭を撫で回した。

――

【記憶持ち】

字の通り、稀に前世の艦娘の記憶をもつ艦娘がいる。

記憶持ちは非常に珍しく、今までに確認されたのは叢雲を合わせて6人であった。

どの艦娘も共通して、艦娘になった時に違和感に気づき、徐々に思い出していくパターンであった。

しかし、それが戦闘の経験のみだったり、自分に関係性のあった艦娘のみ覚えているなど記憶の復元に一貫性がなく、何故記憶持ちになったのか、実例が少ない事に詳しくは解明されてはいなかった。

ただ、4人目が出た時に事件が起きた。

4人目の記憶持ちが発覚した艦娘に、先代の艦娘の話をした時、その艦娘が突如頭を抱えて、頭痛を訴え始めた。

さらに同じ艦娘達に怯えて、寒い寒いとガタガタと震えだす。

そして最終的には発狂して自殺したのだ。

同じ艦娘に殺されると、嘆きながら。

専門家が言うには、急激に行われた記憶の復元により、脳あるいは精神が耐えれずにショートしたのではとの話であった。

しかし、記憶持ちの実例があまりにも少なすぎるので、その結論は確固としたものではない。

ただ、その扱いは慎重なものになった。

記憶持ちが発覚した場合は、なるべくは彼女達が関わりがあつたであろうと思われる艦娘や提督からは離す事になる。

なので、本来なら叢雲はこの鎮守府から外さなければならぬのだが、今の鎮守府の現状、また叢雲が冷静なのもあり、北上は静観する事にした。

木曾はそう言った話を言い回るような娘ではないので口止めしなくとも大丈夫であろう。

それに、叢雲なら：昔の彼女に似ている今の叢雲なら、必ず良い方向に転ぶであろうと、北上は少なからず期待を胸に込めるのであつた。

――

食堂を出ると、叢雲は道場に向かった。

道場に軽く礼をして入ると、更衣室で胴着に着替える。

道場に出ると軽く体操をして、立てかけてある棒を手に取り、構えて突きの練習を始めた。

叢雲は特に武道をやっていたわけでもないので、流派等はないが、軍隊の教育で習った銃剣道が叢雲の武器にマッチしていたので、毎日がむしやらにその基礎をこなしていた。

いつも通り、人形に向かって突きの練習をしていると、道場の扉が開く音がしてそちらに顔を向ける。

「邪魔するぜ」

「木曾？」

「止まってる的が相手だどつまらんだろう？どうだ、手合わせしないか？」

「どうって…」

確かに、最近是对人戦は全然やっていない。

敵は動く標的だ、訓練としては願ったりもない。

しかし、問題はあった。

「私なんかアంతの相手になるの？」

「意外と謙虚だな。そこら辺は手加減するさ。本気でやったら一瞬だし」

「それならお願いするわ」

「…ほう、怒らないのか？」

「は？何ですよ？」

木曾は感心したように叢雲を見るが、叢雲は訳がわからないように頭を傾げる。

「いや、馬鹿にしてーって感じで」

「10年前の大戦の生き残りに勝てる何って思っていないわよ…ただ」

「ただ？」

「何かは掴めるかもしれないからね」

叢雲の真っ直ぐな瞳に、木曾は軽く口笛を吹く。

木曾は道場が上がると、竹刀置き場から一本の竹刀を取り出し、叢雲の正面に立つ。

「合図は？」

「いつでも？」

「そ…うっ!!」

言うや否や、叢雲は木曾の首に目掛け木銃を突き出す。

木曾はそれを軽く首をそらして回避、叢雲はすぐに木銃を戻すと直ぐに銅に向けて突き出す。

今度は半身になって回避された所に、叢雲は無理に突っ込まずに直ぐに元の構えに戻ると、木曾が右手に持っていた竹刀を横薙ぎに振るってくる。

落ち着いて木銃で防ごうとしたとたん、当たる直前に竹刀がくるり

と周り、叢雲の脳天を襲う。

(なんって手首してんのよ!?)

叢雲は驚愕しながらもどうにか首をそらして回避するが、肩のあたりでピタッと竹刀が止まった。

「一回死んだな」

「…そうね」

かなりの勢いで竹刀が来たので、叢雲は歯を食いしばって耐える覚悟をしていたが、またもやびったりと止まった竹刀に脱力した。

「もう一回お願い」

「おお、何回でも良いぞ」

「あと、もう一つ良いかしら」

「ん?なんだ?」

「寸止めは辞めてくれる?」

叢雲の言葉に木曾は嬉しそうにニヤリと笑う。

「すまない」

「何がよ」

「お前を見くびってたよ」

木曾は、元の位置に戻ると静かに叢雲を見据える。

その木曾の眼光に叢雲は冷や汗を流すが、木曾に笑いかえす。

「それはどうも」

「少し本気で行く」

「…っ!?!」

気迫だけで押されそうなのを脚に力を入れて踏ん張る。

「力み過ぎだ」

「っ!?!きゃあっ!?!」

一瞬にして目の前に現れた木曾にいきなり吹き飛ばされて叢雲は、受け身も取れずに道場に叩きつけられた。

何が起きたかわからないが、腹部が痛むあたり、恐らく胴を打たれたのだろう。

「くっ、まだよ!?!」

「遅いぞ」

直ぐに立ち上がろうとするが、今度は突き飛ばされて道場の壁にぶつかる。

一瞬呼吸が止まり、遅れてきた背中の衝撃に叢雲は膝をついて倒れこむ。

「敵は待つてくれないぜ？」

「ぐっ、ハア…ハア…」

「それと、常に視界から離すな。吹き飛ばされた時も常に視界に入れとけ」

「ぐう…っ、も、もう一本」

自身を睨みつけながら立ち上がる叢雲に、木曾は少し思い出す。

(そういえば、前の叢雲も提督に扱かれては向かっていつてたな)

内心微笑みながらも、容赦なく木曾は叢雲に襲いかかる。

(本当に負けず嫌いな所も似てるな。これは記憶なのか、はたまた『叢雲』としてのサガなのか)

何度もボロボロになりながらも叢雲は立ち上がる。

ろくに、木銃も持てないだろう状態であっても。

それでも木銃を握りしめて立ち上がる。

(この熱いところは、本当に変わんねえな)

叢雲の意識が飛ぶまで、時間にしては精々一時間もたっていないのだが、木曾のスパルタな稽古は続いた。

そして意識が飛んでも、木銃を離さなかった叢雲に、木曾は呆れた溜息をつく。

「最後まで気づかなかったな」

「精進が足りん」

「ククツ…手厳しいな」

道場の陰から、気配を殺して最初からいた提督が、木曾の言葉に答える。

「だが」

「だが？」

「悪くない」

提督の言葉に、木曾は提督の方視線を向ける。
その口元は、嬉しそうに笑っていた。

2章―4 弱さ

同室の摩耶が出て行った後、羽黒はベットの所で丸くなっていた。羽黒はあの事件以来、部屋に引きこもっている。

彼女が救出されたのは比較的にもだと言われた部屋だったのだが、それでも地獄には変わりなかった。

もともと気が弱く荒事が苦手な彼女は、襲い来る暴力にただ丸まって震えることしか出来ないでいた。

そんな中、彼女を：いや彼女達を救ってくれたのが那珂であった。

那珂は必死に奴らの目を自分に注意を引き付けていた。

周りの艦娘に被害が及ばぬように自分の身を呈して。

自分の方が酷い状態なのにも関わらず、決して弱音を吐かずに笑顔を作って励ましていてくれた。

羽黒は那珂よりも年上であり、しかも自分は重巡艦。

本来ならば自分が彼女達を護らなければならぬ立場なのに、羽黒は自分の事で精一杯で震え謝ることしか出来なかった。

救出されてから日に日に積もる自責の念に、羽黒は部屋に閉じ籠ってしてしまう。

いまだに那珂の顔が見れずに、お礼さえも言えないでいた。

(何で、何で私なんかが…艦娘に…)

もう何度目かわからない自問自答。

羽黒は自分が艦娘として覚醒した時に絶望した。

物心ついた頃から艦娘になるまで、喧嘩はもちろん、口論さえもやったことの無い大人しい性格であった。

だが暗いというわけでもなく、他人の顔色を見ながら話を合わせ、付かず離れずの距離をいつも保っていた。

よく言えば社交的で、悪く言えば八方美人な生活であった。

そんな性格を羽黒自身も自覚していたし、それが悪いとは思ってはいなかった。

そうすれば、他人と争わなくても良いし、巻き込まれる事もほとんどない。

だが、艦娘となればそういう訳にも行かない。争わらなければならぬのだ。

敵の命を奪わなければならない。

敵に命を狙わられなければならない。

植物の様な人生を望む羽黒には絶望であった。

羽黒は反対しなかった。

絶対に、なんとしても避けたかった。

しかし、両親と周りの人々が大喜びして羽黒に過度な期待をしてしい、羽黒の心を追い詰める。

また、軍艦として名高い【幸運の艦羽黒】である。

完全に四面楚歌状態で断るに断れず、流されるまま艦娘になってしまった。

軍での団体生活はもちろん、戦闘を、殺し合いをしなければならぬのだ。

羽黒は見送られる中、笑顔の下で絶望に涙を流していた。

軍に入隊し、半年ある基礎課程でどうにか的には当てられるようになったが、実践式の演習では完全に足手まといになっていた。

しかし、戦いたくない一心で学業に専念したお陰で事務仕事はかなり優秀になり、艦娘達の面倒見も良いことから、戦闘面は鎮守府に配置してから鍛えていく事に決定されて、そのまま鎮守府配置となった。

羽黒の計画通り、あまり戦闘に参加しない提督達の事務仕事の補佐を優先的にと配置されたのであった。

そして初めて山風、霧と共に着任した鎮守府が、この舞鶴鎮守であった。

緊張と不安を抱えて着任した羽黒達を、前提督は快く迎えてくれた。

「私も争い事が苦手なんだ。暫くは事務仕事だから安心してくれ」

「なに情けない事を言ってるのよクソ提督!!」

「あはは…」

情けなく頭を掻く提督にツツコミを入れる曙。

その様子を困った様に笑う吹雪を見て、羽黒は安心感を覚える。
ここならやっつけていけそうだと。

「新装備の試験ですか？」

書類に目を通していた羽黒は、提督の言葉に顔を上げる。

「ああ。戦力強化の為に装備が明日日本部開発部から送られてくるんだ。羽黒、お願いできるか？」

羽黒は明日の業務日程に目を落とす。

「明日は摩耶さんが警備で出撃でしたからね。畏まりました」

「ありがとう。では明日の昼一で軽くお願いするよ」

「軽くって……ふふ、了解しました」

提督の適当な言葉に羽黒は笑いながら了承すると、提督から企画書を受け取り確認する。

20・3cm(2号)連装砲。元の20・3cm連装砲よりも火力が少し高いが、安定性を重視して上げた物になっている様だ。

企画書に自分の名前を記入すると、提督に書類を返す。

(書類整理ばかりで、久しぶりに射撃訓練だな。上手くできるかな。まあ、動作確認だから問題はないか)

少し気楽に考えながら、再び書類業務に戻るのであった。

――

翌日の朝、鎮守府こ工房に新装備が届いた。

羽黒は装備に不良がないか軽くチェックする。

特に問題がなかったので、艦装を展開して今装備中の主砲と新しい主砲を換装する。

一度艦装を戻して再び展開すると、問題なく換装できている事を確認した。

あまり見た目は変わらないが、やはり新しい物の為か若干違和感を感じる。

少し動作試験を行う。

(若干感度に違和感があるかな。まあ、新しい装備だし、慣れ次第って感じかな)

感覚は誤差範囲内だった為、装備の受領手続きを行って午前は終了した。

午後からは新装備の試験運用を行う為、提督と秘書官の吹雪と一緒に演習場に向かう。

『準備は良いか、羽黒』

「はい、大丈夫です。司令官さん」

『ではタイミングは任せる』

「了解しました」

羽黒は大きく一回深呼吸すると、標的に向かって連装砲を構える。(距離、射角、問題なし。風も無いいい天気だ。一発目で当てられたら、司令官さん驚いてくれるかな?)

内心余計な事を考えつつもしつかりと目標に向けて照準を合わせる。

(が、がんばるぞ…)

キョツと体に力を入れて、連装砲を発射した瞬間、羽黒の視界は真っ白な光に包まれた。

「きやああっ!?!」

『羽黒!!』

『羽黒さん!!』

突如、連装砲が大爆発したのだ。

至近距離での爆発に羽黒は吹き飛ばされて、水面を転がる。

羽黒の意識はそこで途絶えた。

――

ふと目が醒めると、羽黒は知らない場所にいた。

知らない、と言うかあたり一帯闇でなにも見えない。

「…ついで!」

立ち上がるた為に身体を動かそうとすると、全身に激痛が走る。ぼんやりとした頭に、一気に電流が走り、少しだけ頭が冴えてくる。

(そういえば…連装砲のテストで…私…)

引き金を引いた瞬間に連装砲が至近距離で爆発したのを思い出す。かなり痛みはあるが、腕は日本とも感覚があるので、どうにか五体満足の様だ。

しかし、手首足首と首の辺りに何か違和感を感じる。

「す、すみません…だ、誰かいませんか…」

羽黒はどうか声を出すのが、何の反応も返ってこない。

何度か声を出してみるが、結果は同じであった。

(い、一体…ここは何処なの…？何で誰もいないの…？)

少し間を置いて再び声を出す、全く返事はなく、困惑と不安だけが募っていく。

「司令官…吹雪ちゃん…」

最後に見た二人の事を思い出す。

きつと心配している。

私を探している筈だ。

ここが何処なのかわからないが、意識があるという事は、轟沈していないのは確かだ。

誰かが助けに来てくれると他人任せな希望を持ちながら、痛む身体に耐えきれず再び意識を手放した。

……

それから何度も覚醒と睡眠を繰り返したが、一向に状況は変わらなかった。

もう何週間、何ヶ月ここにいいのか解らない。

お腹が減った。寂しい。動けない。

誰か、誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か。

羽黒の思考がひどく乱れ出した時、不意に音が聞こえた。

微かに、本当に小さな音だが、羽黒は状況の変化に歓喜した。

(誰か…誰か…誰か…)

次第に音は大きくなり、何かが開く様な重い音が聞こえて、薄っすらと光が差し込む。

どうにか光の方向に顔を向けると、よく見えないが人影が見えた。

人影はゆつくりとこちらに向かってくる。

「まだ二日しかたっていないのに、酷い有様だな」

「…え？」

羽黒は有り得ない声に辛うじて顔を上げる。

視線が、自分を見下ろす視線と目が合う。

まるで、道端のゴミを見る様な不快感を隠そうともしない視線。

「本当にお前は無能だよ、羽黒」

そんな提督の言葉を、羽黒には理解することが出来なかった。

――

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

襲いくる理不尽な暴力の中、羽黒は丸まりながら謝るしか出来なかった。

それでも止む事のない理不尽な暴力。

ここに来てから毎日毎日、殴られ、蹴られ、踏みにじられる日々。

羽黒の心は磨り減っていった。

しかし、ある日を境に羽黒への暴力は激変した。

「わたしがっ！わたしが皆さんを笑顔にしますからっ!!」

那珂が大声で叫ぶ。

それまで羽黒を黴っていた連中や他の艦娘で遊んでいた連中は那珂に集まり、ゲスな笑顔を浮かべて、新しいおもちゃを取り囲む。

しかし、那珂はどんなに辛い目にあっても、何度も何度も叫んで、他の艦娘達から自分へと関心を向けさせた。

他の艦娘へ手を出すなど、自分が身代わりになると。

当時は自分の事でいっぱいになっていた羽黒は、その事に気付かずただ震えているだけであった。

(いや…私は気づいていた)

拷問の時間が終わっても、那珂は周りの艦娘達に必死に声をかけていた。

自分の方が辛いのに、涙も出さずに。

(私は…私は目を背けていたんだ)

羽黒は怖かった。

全てを知っていて彼女一人に擦りつけていた。

そんな自分が、彼女に許してもらえないはずないと、顔を合わせるのが怖かった。

周りの目を見るのが怖かった。

だからずっと、部屋から出ずに引きこもっていた。

幸い、同室の摩耶は何も言っただけでよかった。

それどころか、もともと面倒見がよいのか、食事を運んでくれたり、洗濯物や着替えを用意してくれた。

その優しさが余計に羽黒を惨めにしていた。

ぼんやりと窓の外を眺める。

(私は…どうしたらいいの…)

その時、不意にドアを叩く音が鳴り、羽黒は怯えて布団を被り丸々が、聞こえてきた声に少し安堵する。

「羽黒、良いか？長門だ。入るぞ」

「は、はい…どうぞ」

返事をしながら急いで布団を脱ぎ去り立ち上がると、長門が扉をあけて部屋に入ってきた。

怯える羽黒を見た長門は少し微笑むと、椅子に座るように促した。

羽黒は遠慮がちに椅子に座ると、摩耶の机の椅子を持った長門が、羽黒の正面に座った。

「調子はどうだ？」

「は、はい…大丈夫…です」

「そうか、なら良かった」

「あ、あの…」

「ん？どうした？」

「そ、その…申し訳、ありません…新しい司令官の、出迎えに立ち会えず…」

おどおどと頭を下げる羽黒に、長門は少し笑いながら頭を上げるように促す。

「私に言うのではなく、それは提督に伝えてくれ。きっと許してくれるぞ」

「……はい」

「心配するな、私が保証する」

「善処、します」

小さくなる羽黒の頭を撫でながら、長門は唐突に話を変えてきた。

「報告には聞いていたが、良ければそちらの部屋であつた事を教えてくれないか？」

「えっ？」

羽黒は俯いていた顔を上げて長門瞳をみる。

じつと、自分の瞳を正面から見つめる長門に、羽黒はぽつりぽつりと話し始めた。

「……」

報告は途中から懺悔に変わっていた。

黙って聞いてくれていた長門に、羽黒は全部吐き出した。

吐き出して吐き出して、最後は言葉にならずに嗚咽を流すだけであつた。

それでも、長門は黙ってそこにいてくれた。

暫くして、落ち着いた羽黒は長門の瞳を再びみた。

「長門さん……私は、どうしたら、いいのですか……。私はただ……ただただ静かに……生きていたいだけなのに……」

「……」

「争いなんつてしたくない……痛いのも嫌だ……なんで私が……」

「……」

「私は……私はどうしたら……」

最後は消えるように眩き、再び視線を落とす羽黒。

「私はな、羽黒」

「……」

「いや、私もだな。私も艦娘になるまでは、争い事等した事のない、文学少女だつたんだよ」

「……えっ？」

「なんだその反応は。失礼だな」

驚いた顔を見せる羽黒に、長門はくつくつと笑いながら抗議する。

「ご、ごめんなさい!」

「いや、構わんさ。今の私を見ても想像できないからな」

「長門さんは…艦娘になったのは結構昔と伺っておりますが」

「ああ、そうだな。まあ、武蔵達よりは遅いがな。私が艦娘になったのは10年前だ」

「10年前…10年前って…」

「ああ、そうだ」

思い立った羽黒に、長門は同意しながら答える。

「私はあの大战中に艦娘になったのさ」

懐かしそうに思い出しながら長門は話した。

「当時は余裕がなくてな。艦娘に目覚めたばかりの私はろくな教育もなく、いきなり戦場におっぽり出されたよ」

「えっ!?!」

驚いて声をあげた羽黒に、長門は笑いながら説明する。

「当時は艦娘の人数も少なく、しかし敵の猛攻が凄かったからな。今みたいにちゃんとした教育をする時間など無かったんだよ。殆どの艦娘は、いきなりの実戦で生きるか死ぬかの戦いを強いられていた」

「そんな…」

「酷いだろ。でも、そうでもしなければ日本は滅んでいた」

それ程までに酷い状態だったのかと、羽黒は息を飲む。

当時は羽黒は幼く、ましてや戦争等理解できるはずもなかった。

政府の意図的な情報操作により、暗い話が表立って出ていなかったと言うのもあるが。

「自分で言うのもなんだが、当時羽黒の様だった私には本当に地獄だった」

「……」

「怖くて怖くて毎日泣いてたもんさ」

「どうして」

「ん?」

「どうして、長門さんは変わったのですか?」

「そうだな……」

どこか遠くを見る彼女の横顔に、羽黒は見惚れてしまう。

「託された…：からかな」

「託された…：？」

「そう」

長門はゆつくりと頷くと、羽黒に困った様な笑顔に向けて答えた。

「私の姉であり、妹である。大切な人にね」

2章― 5 受け継ぐ思い 前編

艦娘になる前の長門は、大人しい少女であった。

彼女は本が何よりも好きで、自他共に認めるほどの本の虫であった。

当時高校を卒業した後は、そのまま地元図書館に就職し、夢に見た本に囲まれた生活を送っていた。

しかし、そんな彼女の生活は一年も経たずに幕を閉じる事になる。

ある日、いつも通りに図書館に向かうバスの中で、急激な頭痛と目眩に襲われた彼女は、艦娘に目覚めてしまう。

その時に、頭を抱えて座り込んでしまった彼女を心配して集まった人々に、頭部の艤装が展開されたのを目撃されてしまい、目撃者が軍に連絡をしてしまったのだ。

そのまま気を失った彼女は、駆けつけた軍人たちに軍病院へと搬送された。

彼女の悲劇はここから始まる。

診断の結果、彼女は艦娘の能力に目覚めていた。

軍から連絡があり駆けつけた両親は、彼女が艦娘となった事を大いに喜んだ。

喜んでしまったのだ。

艦娘になってしまったと言うことは軍配属になる。

表面上は任意となっている。

しかし、今この世界において、『艦娘になる』とは誇りであり名誉である。

それは幼い頃から義務教育で教育があるぐらいだ。

実際は、政府側の艦娘への抵抗を無くす一種の洗脳のような教育なのだ。

そのおかげで断ろうものなら世間から何を言われたものではない。

更に、彼女の悲劇はさらに加速する。

彼女が目覚めたのはよりにもよって戦艦。

しかも『長門』であった。

軍は大喜びし、大々的に長門復活を報道。

彼女の逃げ場は無くなっていた。

数日後、憂鬱な気持ちのまま軍隊の装甲車が迎えに来て、助手席に乗っている制服の女性自衛官が降りてきて、両親と長門に挨拶をする。

「申し訳ありませんが、本来は艦娘用の教育学校に向かってもらうのですが、戦果が激しい現状では教育する時間がありません。そのまま部隊配属になります。そこで直接講習になりますので。場所は佐世保になります。」

彼女に促されて車に乗った長門は、乗るや否やそう言われてしまい、内心酷く怯えてしまつて返事が出来ずにいた。

また、長門の緊張を解そうと聞いてもいないのに『ゲリラ対策の為装甲車で迎えに来ました』と一般人からしたら思いジョークなのかただの報告なのかわからない事を伝えてくる。

長門は更に血の気が引いてしまい、ひたすら下を向いて震える事になる。

そんな事は御構い無しに、装甲車は佐世保鎮守府へと向かう。

一人思い沈黙の中、しばらくして目的地の佐世保鎮守府に着いたのか、車が止まりドアが開けられる。

(黄泉の船が終わり地獄へとたどり着いてしまった…)

絶望に打ちのめされた彼女は、軽く涙目になりながら、のそのそと重い体を引きずつて車から出る。

そこで一人の艦娘と出会った。

「こんにちは」

おずおずと送迎の車から降りて、浮かない顔で下を向いていた長門に明るく声をかけてきた彼女。

「戦艦的には貴女がお姉ちゃんだけど、艦娘曆的には私がお姉ちゃんになるかな?」

その言葉を聞いて、長門は疑問に思い顔を上げると、そこには自分に負けず劣らずの長身の女性がいた。

短髪でやや中性向けの凛々しい顔つき。

かなりスタイルが良く、かなり引き締まっており、一切の無駄がないアスリートとの様な身体。

「長門型戦艦2番艦の陸奥よ」

控えめに言ってもかなり美人に分類される綺麗な顔。その顔には右頬から顎下に向かって傷があるのだが、それも含めて彼女の魅力を引き出していた。

「よろしくね」

そんな彼女に見惚れてしまい、彼女は差し出された右手に反応できず固まってしまった。

――

「君の姉妹艦が本日着任する。大変人見知りとの話だ。良ければ迎え頼まれるか？」

先日提督にそう言われた陸奥は、仁王立ちで門の前に立っていた。連絡によれば、もう少しでこちらに着くとのことだ。

（長門ね。大丈夫かしら）

先日提督から聞いた話によると、本当にただの一般人。

武道やスポーツをやっていたわけでも無く、趣味は読書と言う大人しい性格。

艦娘に目覚めたからには多少は身体は強化されているとは思いますが、はたしてそんな娘が軍隊でやっていけるのだろうか。

（無理、でしょうね）

陸奥は軽く溜息を吐く。

大人しいと言う事は、恐らくは己の意思で入隊に志願した者では無いだらう。

周りの目や言葉を気にして、断ることも出来ず入隊になってしまったたちだ。

上の人間も彼女の事を一通り調べているはずだから、それくらい知っているはずだ。

知っていて、知らないふりをして軍隊へ入隊させたのだろうか。

実際にそういう艦娘は結構いた。

そして当たり前ながら、そういった子達の被弾率は高く、轟沈もか

なり多いかった。

我ながらヘドが出る。

(しかも、それが長門か。責任重大だなあ)

少し重い気持ちになり、再び陸奥は深い溜息を吐く。

ふと、門の開く音と警衛の声が聞こえてそちらに目をやると、丁度警衛所に一台の装甲車が到着した。

助手席の扉が開き、隊員が後ろのドアを開く。

後ろから降りてくる女性を見た瞬間、陸奥は落雷が落ちたかの如く衝撃を感じた。

原因は車から降りる彼女。

目が離せなかった。

お嬢様の様な綺麗な顔立ちに、腰まで伸びる綺麗な黒髪。

玉の様な色白の肌に細くて長い手足。

そして、前髪の間からちらりと覗いた宝石の様な綺麗な瞳。

何もかもが自分と正反対の彼女。

彼女は紛れもなくお姫様であった。

直感的に陸奥は思う。

(私が、私がこの娘を守らないと)

それは艦娘としての姉妹艦への家族愛なのか、はたまたただ単に一目惚れという不純な動機なのかはわからない。

どちらにしろ、陸奥はこの日固く決意をした。

(たとえ世界を敵に回しても、私はこの子の側にいる)

――

「ご、ごめんなさい…」

「まあまあ、気にしないで」

長門の失敗に陸奥は笑顔で返す。

あの日からもう10回目の出撃になるが、長門は未だにうまく戦えないでいた。

それどころか、完全に陸奥の足を引っ張ってしまっており、酷い時には中破までの損害を与えていた。

それでもいつも笑いなが許してくる陸奥に、長門は申し訳ない気持

ちでいっぱいになる。

「何度も言ってるけど、一般人がいきなり戦場に叩き出されているのよ。むしろ、逃げ出さないのが凄いや」

「そ、それは!!ただ、足が竦んでしまつて…」

「それでもしつかり目を開けて、戦闘を見ているから凄いや」

「う、うう…」

言えなかった。

戦っている陸奥がカツコよくて、目を瞑る事が出来ず、見つめていたのだと。

自分を守ってくれている陸奥が、まるで騎士のようで見ほれていたなど。

ただでさえも役に立てていないのに、そんな不純な動機、言えるわけがない。

「それにまだ2ヶ月だ。仕方のないことだよ」

そんな長門の気も知れずに頭を撫でる陸奥。

長門は耳まで真っ赤になり、俯いてしまう。

「はいはい!長門さんと陸奥さんがまたイチャついてまーす!」

「む、村雨!じゃ邪魔しちゃう駄目だよ!」

「五月雨、その言い方は…」

「あう!す、すみません!!」

冷やかす村雨を止めようとした五月雨が、春雨に指摘されて頭を下げる。

長門は恥ずかしさにさらに縮こまり、陸奥は豪快に笑いながら駆逐艦たちの頭をわしやわしやと撫でた。

駆逐艦たちは「キヤーツ」と黄色い声を上げながらその場から走つていなくなる。

黄色い声を上げてたのは村雨だけであつたが。

「気を遣わせちゃったかな」

「どうだろうな。全く、生意気に」

苦笑いしながら駆逐艦たちが去っていた方向を眺める陸奥。

彼女は気が緩んでる時に、少し口調が男勝りになる。

長門はそれが少し嬉しかった。
自分達には気を許している証拠が。

――

「そういえば、来月こちらに剣鬼の娘さんが来るらしい」

「剣鬼の娘って、あの剣神と呼ばれている?」

「ああ、久しぶりに彼女と会う」

剣神。

現代柳生新陰流の師範代の娘の呼び名であった。

剣鬼と呼ばれる、現柳生新陰流師範代以上の實力をもち、柳生新陰流だけではなく、二天一流、鹿島神流、タイ捨流、北辰一刀流、馬庭念流、葉丸自顕流等、様々な流派を免許皆伝、その現代師範代を打ち負かしていると言う事だ。

まだ十代の少女が。

そして、何よりも一番の偉業が四年前の出来事。

「深海棲艦を斬ったって」

「ああ。凄かったぞ」

「え?!陸奥、見たの!?!」

長門の驚きに、陸奥は笑いながら答える。

「当たり前だよ。あの事件は私の進水式の時だったからね」

陸奥は当時を思い出しながら、嬉しそうに長門に話した。

――

当時の陸奥の進水式。

いよいよ陸奥の紹介となり、控え室を出て会場に声援を受けながら入場した。

瞬間、大きな振動と爆発音がなり、会場全域に警報が鳴り響く。

突如深海棲艦が特攻を仕掛けてきた。

しかも戦艦クラスの深海棲艦が6隻もだ。

進水式は緊急中断、民間人を避難誘導し、警備の艦娘達で迎撃を行った。

戦艦クラスの特攻ともあり、集中砲火にも関わらず中々轟沈させる事が出来ずに、遂に会場へと一体の侵入を許してしまう。

その一隻は【鬼】であった。
戦艦5隻は【鬼】を守る為の盾役だったのだ。

【鬼】が侵入後、戦艦達は横隊に展開して海面入り口を堅めた。

【鬼】は、会場に入るや否や周りを見渡し、避難誘導中の陸奥を見つけると、水面を蹴り観客席に着地。

獰猛な笑みを浮かべて、凶悪な主砲を向けた。

実戦もまだ、ましてや殺し合い等やった事のない陸奥は、初めて自分に向けられた殺意に身体が固まる。

(あれはヤバイ!!)

頭では理解しながらも、体が動かない。

赤黒く禍々しい光を放ち始める敵の殺意に陸奥は直感的に死を覚悟した。

しかし、それは一筋の銀門により阻まれた。

斬り飛ばされた砲身。

【鬼】の理解ができない顔。

その時、陸奥は彼女を見た。

その姿を見て身震いする。

あるはずのない彼女の姿を。

――

陸奥は幼い頃から空手を学んでいた。

武道に身を置く以上、彼女の存在は知っていたし、遠目ながら見た事もあった。

その時に見た、いや魅せられた彼女の剣舞。

まだ少女である彼女の剣さばきに、周りの人間は魅了された。

陸奥もその一人であった。

あまりにも繊細、しかしながらも大胆。

流れるような剣戟に感嘆していた。

しかし、それさえも凌駕する流星の如き太刀筋。

たった一線にも関わらず、あの目に焼き付いた剣舞よりも研ぎ澄まされた一太刀。

陸奥は彼女が本気で刀を降るところは初めて見た。

本来人の動体視力では見えなかったであろう、恐らく艦娘になれたから見えたのだろう。

それでもかろうじで見えた美しい剣筋。

目を見開く陸奥の瞳を、横顔の彼女の瞳が捉えた。

瞬間、陸奥は動いていた。

自分でも気づかずに、完全に無意識。

陸奥の拳は無防備な【鬼】の顔面を捉えて、爆裂音と共に吹き飛ばしていた。

【鬼】は錐揉みしながら、侵入してきた会場の海面入口近くの海面まで何度も水上をバウンドしながら吹き飛ばされ、倒れこむ。

「手助けは無用だったか」

ふと呟く彼女に、拳を振り抜いた形のままだった陸奥は視線を送ると、大きく息を吐いて姿勢を正す。

心は驚く程静かであった。

「いや、助かったわ。礼を言わせて」

「それには及ばんよ」

『陸奥、聴こえるか』

突如流れた通信機からの連絡に、陸奥は答える。

「こちら、陸奥。提督状況は？」

『ああ、もう少しで外の状況は終了する。10分ほど耐えられるか』

「ええ、大丈夫よ。こちらには剣神もいるしね」

『了解。無理はするなよ』

通信が終わり、陸奥は【鬼】に視線を向ける。

【鬼】はゆらりと立ち上がり、こちらを睨み返してくる。

先程の一撃が思った以上に聞いていた様だ。

顔の一部が腫れ上がっており、口から血が滴っていた。

しかし、その口元が不吉に釣り上がる。

「…つち」

陸奥は思わず舌打ちをした。

【鬼】の背中から現れたのは艦載機。

対してこちらはの主砲は祝砲用の空砲であり、対空装備も無し。

こちらが唯一得意の白兵戦も、制空権を完全にとられている以上接近は容易ではない。

しかし、10分も艦載機による防御は不可能だ。

「水上は、私では役に立たないな」

「え？」

「私は空を相手する。頭は貴殿に任せよう」

陸奥は最初彼女が何を言っているか理解できなかった。

（彼女は…奴を倒す気なのか…？）

「共闘、と言うのは初めてなのだが、貴殿となら大丈夫だろう」

彼女は何の問題もないと言う感じに刀に手をかける。

一体全体、どうやって刀一本で空の敵に対抗するのか不明だが、陸

奥は気づけば笑っていた。

隣に彼女がいると言う安心感。

「まあ、誰に喧嘩を売ったか解らせてやるか」

「貴殿はその喋りの方が良いぞ」

「提督が煩いんだよ。模範となれってな」

「なるほどな。ちなみに残り残弾は？」

「無いわよ。あるのは空砲が三発」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫」

ふとこちらに視線を向ける彼女に、陸奥は獰猛に笑いながら拳を合わせる。

「コイツで十分」

彼女はそんな陸奥を少し見つめると、再び正面を見据える。

その横顔は心なしか嬉しそうであった。

――

残りの艦載機を全て発艦させた装甲空母鬼は勝ちを確信していた。

主砲はやられたが、残りは素人同然の戦艦たった一隻。

隣に立つ自分の主砲を斬り落とした謎の人間は、こちらは水面にいるためにもはや脅威では無い。

自分は確実にここで沈むが、戦果としては御の字である。

視線の先にいる陸奥は武装を展開すると、海に着水する。

事前に密偵の情報で、陸奥が実弾を装備してない事を知っていた。

陸奥の行動に不信感を覚えつつも、最後の悪足掻きだと装甲空母鬼は判断した。

しかし、先程の人間の一件もある。

たとえ最後の足掻きだろうが、油断はしないと、しっかりと陸奥を見据える。

隣の人間が離れると、陸奥は案の定こちらに向かって航走を始めた。

自分との間には30機近くの艦載機があるのに、愚かだと内心嘲笑いつつも、慎重に観察する。

しかし、直ぐに驚きに目を見開く事になった。

陸奥の背後から、先程の人間が飛び出した。

正確には、助走をつけた人間が100m程の飛距離を跳び、そのまま陸奥の艦装を踏み台にして跳び上がった。

跳び上がった人間はあろうことか、近くにあつた艦載機を斬りつけながら、また近くにある別の艦載機を踏み台に跳び、すれ違いざまにまた斬り落とす。

何よりも振った刀が全く見えなかった。

【鬼】から見たら、常に刀は腰の鞘に入ったままで、気づけば斬られている。

——理解不能——

一番理解できないのは、自分がその光景を美しいと思ってしまったことだ。

「隙だらけだ」

「!？」

完全に思考が停止して、その光景を唾然として見ていた装甲空母鬼は、突如至近距離で発せられた声に顔を向ける。

瞬間、腹部への衝撃に身体がくの字に曲がる。

「カツハアガア!？」

「歯あ食いしばれ」

息を吐き出した瞬間に今度は右手を掴まれて、そのまま顔面に掌底が直撃する。

右手を掴まれている為に背後に吹き飛ぶ事が出来ず、そのまま顔を掴まれて海面へ叩きつけらる。

ーガゴン

朦朧とする意識の中、装甲空母鬼が最後に見たのは、ゼロ距離で自分に向けられ砲身であった。

ー

完全密着状態での主砲の射撃。

41cm連装砲の空砲の威力に、装甲空母鬼の身体は2つに別れ、轟沈した。

陸奥は、そのまま水面を見つめる。

それは初めての殺しの感覚。

今の私としての初めての殺し。

しかし、船としては経験のある感覚。

なんとも言えない感覚に陸奥は何気なく上を向くと、上から降ってくる彼女と目が合う。

「うおお!!」

「邪魔をする」

空から降ってきた彼女は、慌てる陸奥の背中の艤装に器用に着地した。

反動で陸奥はよろけるも、何とか踏ん張って体勢を立て直す。

「隙だらけだったぞ」

「そうだな、すまない」

後ろで厳しい言葉を放つ彼女に、陸奥は素直に謝った。

「しかし、素晴らしい手際だったな」

彼女の褒め言葉に、陸奥は軽く溜息を吐く。

「…空中で艦載機を全て斬り落とした貴女に言われても嬉しくない」

「適材適所だ。私は水中を移動できない」

「ふふ…どうだか。助かったわ相棒」

「…相棒？」

疑問系で聞き返された陸奥は、少し悪戯っぽく笑って返す。

「互いにフオローして勝利したんだから、相棒みたいなもんでしょ。なに？私が相棒は嫌？」

「そう言うわけではない。初めてそんな事を言われたからな」

「まあ、貴女ほど強ければね…」

「ただ…」

「ただ？」

「こういうのも悪くはない」

背後にいるので見えないが鉄面皮の彼女の少し嬉しそうな言葉。

たった十分に満たない戦闘だが、彼女も何か感じ取ることができたのだろうか。

「また」

「ん？」

「また、いつか一緒に戦いおう」

顔は見えないが、恐らく後ろの少女は笑っているだろう。

言葉少ないやりとりだが、気づけば陸奥はどこか晴れやかな気持ちになっていた。

「そうだな」

彼女の返事を聞いた陸奥は、陸に向けて航行した。

2章―6 受け継ぐ思い 中編

「その二年後に彼女は軍隊に入隊したのだがな」

陸奥の話を聞いた長門は、なんとも言えない気持ちになる。

「今まで都合が悪く出逢えないでいたんだ。しかし…」

嬉しそうに語る陸奥。

「しかし、来月ようやく逢える」

楽しそうに話す彼女の横顔を見て、長門は心臓が刃物で刺されたような痛みを感じた。

「陸奥は、彼女が好きなの？」

長門の質問に、陸奥は一瞬丸くする。

少し考えて後、直ぐに笑顔に戻ると長門の質問に答える。

「そうだな。私は彼女が好きだ」

「……」

「それを言ったら、長門。私は君の事も好きだよ」

「え？」

唐突の陸奥の言葉に、長門は赤面しながら困惑の声を出す。

しかし、次の一言でピシリと硬直する。

「それに、ここの鎮守府の仲間も、この国もみんな好きさ」

陸奥は身体ごと長門に向き合う。

「だから私は戦えるんだ。艦娘としての使命ではなく、誰かに言われたからでもない。私は私の意思で、私の大好きなモノたちを壊そうとする敵と戦うんだ」

陸奥の強い瞳に、長門は引き込まれて言葉を失う。

「だから長門、君も私が必ず守ってやる。君が無理に戦わないで良い様に、私が必ず護ってやる。だから、そんなに悲しそうな顔をするな」

長門が悲しい表情になったのは別なのだが、

陸奥の言葉に少しだけ心の変化が現れる。

長門は彼女の事が好きだ。

そんな彼女を失う怖さと、戦う怖さ。

果たしてどちらが怖いだろう。

(そんなの決まっている)

彼女が全てを守ると言うのなら、私は全てから彼女を守れるようになろう。

だから、私も強くなろう。

もつともつと、彼女を守れるくらいに。

彼女と一緒に歩める為に。

(手始めに空手でも、教えてもらおうかな)

自分がそんな事を言い出したら彼女はどんな顔をするだろうか。

クスリと、微笑みながら長門は陸奥に口を開くのだった。

――

「そういえば陸奥の顔の傷って、先程の話を聞く限りその時のものではないのね」

「ん？これか？」

部屋に入ると、長門は先ほどの話を思い出して陸奥に問う。

陸奥は自分の顔の傷をなぞりながら答える。

「この傷は意外と新しいよ。長門と会う一ヶ月前に、深海棲艦とやりあつてな。その時についた傷だ」

傷跡をなぞりながら、陸奥は答える。

「ここ半年くらい前から深海棲艦の動きが活発になつてるのは知ってるよな？」

陸奥は首を縦に降る。

今年に入ってから突如、各地で深海棲艦の襲撃が多発していた。

しかも鬼や姫クラスといった大物の襲撃で、戦火はどんどん拡大していた。

九州方面は比較的に落ち着いたが、北方面は襲撃が酷く、今だに戦闘が続いてるとの事だ。

陸奥と剣姫が会えなかったのはこのせいもある。

「ええ、だから私の進水式も行われなかったと聞いている」

「そうだな。それもあるが、ここ数年は『白』の行動も活発になつていてな。極力狙われやすい状況を行わない様にしているのさ」

「たしか、あの正体不明のゲリラ集団だよな」

「そうだ。今年に入ってから深海棲艦の動きがかなり活発になっており、それに便乗し

てか奴らの動きも活発になっている」

腕を組むと、窓から外を覗きながら独り言の様につぶやく。

「何かの前触れかもしれない。もしくはもう始まっているのか」

難しい顔をしながら長門に顔を再び戻す。

「長門も知っている通り、我々は『船』から『人』になったおかげで、物資および戦術面でかなり楽になった。まあ、その分出現も増えたが」

陸奥の呟きに、長門は苦笑いしながら頷く。

長門にとってはただの不運にしか思えない。

「人型のお陰で船では数ヶ月、下手したら数年かけて修理しなければならぬものが、たった数日で完治する。物資量も陰陽式との複合なので手間暇はかかるが、圧倒的に少なくて済む。だが、圧倒的に不利なものが3つ出来た」

椅子に座りながら話をする陸奥に合わせて、長門も椅子に座る。

「1つは経験。船の場合は人さえ無事ならどうにかなるし、それを専門として訓練された兵士がいるから問題ない。しかし、艦娘の場合はそうではない。また1からの育成となる」

実を言うと、艦娘の8割近くは元民間人なのである。

もともと軍人で艦娘になったものは少ない。

あくまでも艦娘に引き継がれるのは『船』だった時の記憶のみ。

それ以上は今の技術では、脳に対する負荷を抑える事が不可能であつた。

「そして、2つ目は感情だ。我々は感情が生まれたことによって、行動がそれに左右されやすくなった。これはどちらとも言えないが、任務を遂行するには不要の産物だ」

多少の負傷であれ、たとえ航海可能であれ恐怖心が生まれたら動けなくなる艦娘は少なくない。

当たり前のことだ。

平凡な日常から突如戦争に駆り出されて、まともに戦える方がおか

しいのだ。

また、激情により命令を聞かずに行動を起こしてしまう者もいる。よって、やはり任務の失敗率も多い。

未だ巫女としての素質を見分ける方法は不明。なつてからではないと解らないのだ。

非科学で生まれた奇跡は分析のしようがない。

しかし、そんな奇跡に縋らないと、人は戦うことすらできない。

「そして、最後の1つ。これはまあ、2つ目に関与する。どちらかと言えば相手の問題だ」

陸奥の神妙な面持ちに長門は息を飲む。

「敵も『人型』と言うことだ」

深海棲艦。

敵の素性は戦争が始まってかなりの時が経つが、未だに不明。

鹵獲に成功した例はあるが、直ぐに自滅してしまい、情報を得ることができないままであった。

これが異形の形や、まだ人型以外なら戦いやすい。

しかし、なぜか奴らは人型なのだ。

こちらの言葉を理解し、言葉を話し、感情までも備えている敵。

どうしよもなく『人』に近い存在を殺さなければならぬのだ。

それは嫌でも『人殺し』を連想させてしまう。

「だから、長門。君は何もおかしくはないんだ。まあ、私も武道の心得があったから多少はマシだったが、最初は私も割り切れなかった」

「…陸奥はどうやって切り替えられたの？」

「私には守るべきものがある。守りたい人達がいる。先ほどそう話したね？」

「うん」

長門が頷くと、陸奥は真剣な顔から笑顔に変わる。

長門はその笑顔に寒気を覚えた。

「その私が守るべきものを壊そうとするものは全て敵なのさ。例えそれが『人型』であっても『人』であっても関係ない。敵は人ではない。人でないなら、私は殺せる」

陸奥は長門の瞳を捉えながら話す。

長門は陸奥の瞳から逃げられずに、ただ見つめ返すことしかできない。

「大切なものを守る為、私はそう思うことにしている。先程は守ると言っただが、出来たら長門、君にもそう思えるようになってほしい」

「私、にもっ？」

陸奥の言葉に長門は息を呑む。

目の前の愛しい人に対して、脳が本能的に警告する。

「そうだ。大切なものを守るやり方は何も戦う事だけではない。後方での仲間の支援や基地防衛でも一緒さ。ただ、後悔がないように全力を尽くしてほしい」

陸奥は膝の上にある長門の手を自分の両手で包み込む。

「私達は艦娘になった以上、戦いに身を置かなければならないのは確実だ。これは呪いと言っても良い」

世間一般には公開されていないが、暗黙の了解となった事実。

艦娘の殉職率は100パーセントなのだ。

同じ船の艦娘は出現しない。

その船の艦娘が死なない限りは、同じ船の艦娘は現れないのだ。

「だから、私は、『俺』は、この命続く限り、大切なものを守ると決めたんだ。頭の悪い『私』には、作ってもらった『俺』にはそんな事しかできない」

長門は眼が離せない。

先程から現れた、ダイヤの様な陸奥の瞳に群青の炎の様な色。

(これは、誰?)

「だから、長門。君にもそうあってほしい。それが『俺達』の、『私達』の願いなのだ」

「貴女は、貴方は誰なの?」

「何をいつてるんだ?」

陸奥は手を離すと、すっと立ち上がり長門に笑顔を向ける。

「『私』は、陸奥だよ」

その瞳の色は元の色に戻っていた。

「索敵、異常無しです」

「了解、千代田」

「了解」

偵察機を格納した千歳と交代で、千代田が偵察機を飛ばす。

今長門達は、海域での補給物資受け取り、戦闘中海域への輸送任務を行っていた。

先週、四国付近で呉鎮守府の警戒中の艦娘達が深海棲艦の襲撃を受けた。

直ぐに呉鎮守府提督は援軍を出す、敵の総力が多く、艦娘の修復と補給物資の供給が間に合わなくなっていた。

呉鎮守府の提督からその通信を受けた佐世保鎮守府提督は、すぐ様に援軍部隊を編成して、補給部隊を向かわせる。

しかし、呉鎮守府へ航行中に道中で別の深海棲艦から攻撃を受けてしまう。

速さを求めた駆逐艦だけの編成、また補給物資を詰め込んでいた為に、艦隊は成すすべなく蹂躪された。

どうにか轟沈せずに、命からがら撤退するも、物資は海の藻屑になっってしまう。

あまり物資を割くことも出来ない、苦肉の策として民間業者から直接物資を受け取り、そのまま道中の深海棲艦を撃破して前線へと補給物資を送る事にした。

陸奥を旗艦とした、長門、村雨、五月雨、春雨、千歳、千代田で編成される佐世保鎮守府の第一艦隊がこの任務に当たることになった。

「もう少しで深海棲艦が襲ってきた海域だな。千代田どうだ？」

「今のところは異常なしね。もう1小隊念の為に飛ばしとく？距離は狭まるけど、範囲のフォローは出来るわ」

偵察機は武装がない為に、攻撃機と違い操作がかなり楽の為、少し無理をすれば2小隊ほど飛ばすことが可能だ。

しかし、視界が感覚的に二つに別れるし、単純に負荷が二倍になる為に、使いどころは限られる。

陸奥は少し考え、千代田に大丈夫だと伝える。

現在、物資は長門と陸奥で半分ずつ格納している。

もしもの場合はどちらかが何かあっても、もう片方が物資の輸送を担う為だ。

その為装備を少し減らしているので、なるべく体力は温存しておきたい。

しばらくして、千代田の偵察機が戻ってくると、再び千歳が偵察機を発刊させる。

「ん？」

「どうしたの？千歳お姉？」

「少し先に…島のような…ッ!？」

突然偵察機とのリンクが切れて、千歳は大声をあげた。

「前方14時の方向、距離約80キロ!!敵艦発見!!偵察機が落とされました!!」

千歳の言葉に、分散警戒中の駆逐艦達はすぐ様に陸奥達の元へと向かってくる。

「敵は確認できたか？」

「ごめんなさい、いきなり落とされたから確認は出来なかったの。でもとても小さな島のようなものが見えたわ」

「了解、千歳は爆撃機に装備を変更。千代田、敵発見位置まで偵察機を飛ばしてくれ。対空戦力に気をつけて」

「了解!!千代田艦載機!!」

「五月雨、ソナー頼む」

「お任せください!!」

五月雨は少し先行すると目を瞑る。

その横を春雨と村雨が護衛する。

「正体不明の物体確認…なにこれ？何かたこ焼きのようなものが飛んでる…」

「たこ焼き?」

千代田の眩きに、長門が頭を傾げる。

千代田は警戒しながらも、偵察機の機能を使い、確認できるギリギリ

リのラインからそれを確認する。

「これは…嘘でしょ…」

「どうしたの？千代田？」

千代田は急ぎ偵察機を戻す。

彼女が見たものは、真つ白な球体の前に座り込んだ、海面に君臨する異質な白い存在。

「敵は単騎…【姫】よ…」

――

「ソナー、反応ありません」

少し前にいる五月雨から通信が入る。

深海棲艦を目視で確認できる位置まで接近したが、潜水艦等の反応無し。

本当に姫以外は何もない様だ。

その姫も今は目を閉じた状態で微動だにしない。

（事前の情報では、重巡二隻と戦艦一隻のはずだったが…おびき寄せられたか？しかし…）

陸奥は見たことのない、今だ微動だにしない姫へと視線を送る。

（まるで眠り姫の様だ）

眠りにつく姫の周りを、小人の様に球体型の物がふよふよと浮遊している。

恐らくはあれが、千歳の艦載機を落としたものだと予想する。

「千代田、もう一度艦載機を飛ばしてくれないか？敵の反応が見たい。何か動きがあれば直ぐに回避撤退出来るように」

「了解、千代田艦載機発艦!!」

千代田は偵察機を発艦させると、姫の近くまで近接させる。

それを合図に、五月雨達も警戒しながら少しだけ前に出て、ソナーの探知をする。

偵察機が、姫の距離1キロほどに達したところで球体が反応した。

白い球体についている穴に赤い炎の様な光が灯ると、亀裂が入り、裂け、そこから獐猛な牙と長い舌が出現する。

「ギギギギ」

不気味な声と共にソレが口を大きく開けると、中から黒い砲身のようなものが出現する。

「撤退して!!」

その不気味な光景に戸惑っていた千代田は、我に返り、急いで偵察を反転させる。

叫ぶと同時に砲身から閃光が光り、偵察機に死の雨が降り注ぐ。

千代田は意識を集中させどうにか回避行動をとるが、何機かは撃墜されてしまう。

「くっソー」

悪態をつきながらも、どうにか銃弾を避け離れると、途中球体はピタリと動きを止めて姫の元へと戻っていった。

「やられたわ…」

「約三キロほど…一定範囲内の自動防御なのでしょいか…」

千代田が悪態を吐き、千歳は冷静に分析する。

圧倒的有利な状況で迎撃を行わずに戻っていった球体を見るに、間違いないだろうと陸奥は頷く。

(ならば)

「全砲門、開け!」

言葉と共に背中 of 艦装が動き、照準を合わせる。

陸奥は深海棲艦の眠り姫に向かって射撃体勢に入った。

(先手を打たせて貰う!!)

主砲を発砲しようとした時、異変が起きた。

今まで人形のように微動だにしなかった姫が、ゆっくりと目を開けた。

開かれた瞼の下から現れたのは、揺らめく炎の如き紅い瞳。

赤よりも紅い瞳がこちらを見つめる。

瞬間、陸奥は全身に危険信号が流れる。

世界が減速し、脳が本能的に行動を止めようとするが、発射寸前の主砲を止めることはできない。

カチリ

振動、衝撃、熱、痛み、轟音。

突如、陸奥の体中に響く感覚。

「!!!」

遅れてやってくる激痛に声も出せずに蹂躪される。

「ユウバクシテ……シズンデイケ……!」

不敵に笑う中間棲姫の顔を最後に、陸奥の意識は暗闇に沈んだ。